ろ

ろ 五十音圖にて第四十五、即ち、良行於列の假名。伊呂波歌にて第二の假名。

【字體】【萬葉假名】呂・侶・閭・慮・盧・廬・虚・路・露・魯・漏・樓・稜・勒・里。【平假名】ろ ろ ろ(呂より出づ)。ろ(路より)。ろ(樓より)。ろ(侶より)。【片假名】ロ・ロ・ん・ス(呂より)。

【表はす音】呂・侶・閭・慮・盧・廬・婁は呉音ロ、漏・樓・稜は漢音ロウ、勒は漢音ロク、里は漢呉音リ・古音恐らくロ。これらの文字を假りてロの音を表はせり。今ろの表はす音は

一、表音的假名遣にては（イ）子音rと母音オとより成る音節。子音rの説明はらの條一の（イ）を見よ。（ロ）一語中にてろの下にう又はーあるものは、子音rと母音オの長音とより成る音節を表はす。「ぐろう」(愚弄)・「ろーま」(羅馬)の如し。

二、歷史的假名遣にては（イ）一の（イ）に同じ。（ロ）一語中にあるろう・ろふはローと發音するを常とす。「しろうと」(素人)・「ひろう」(尾籠)・「おとろふ」(衰)の如し。

ろ【絽】(名) 薄くして織目の透きたる絹地の織物。夏著に用ふ。

ろ【廬】(名) 小さく粗末なる家。假屋。

ろ【爐】(名) 床を穿ちて設け、火を燃やし又は火を貯へて煮燒し、又、暖を取る所。ゐろり。

ろのなごり 爐名殘 爐塞(ロフサギ)の前に催す茶の會。槐記享保十二年八月廿一日「風爐の名殘と申すことは、何とぞ其のあしらひあることにやと覧ふ（爐の名殘と云ふことは古よりあり風爐の名殘と云ふことは先になし）」類題發句集三月「客亭主共に老いけり爐の名殘(諷竹)」

ろ【艪・艣・櫓】(名) 船具。水中に押して船を進むるに用ふる長き木竿。通常櫓材を繼ぎ足して長さ一丈許りに作り、中程に穴あり、艪臍(ロヘソ)に嵌め、上端(らでと云ふ)の凸起(つくと云ふ)を艪繩にて艪床(ロドコ)に繫ぎ、押して手許に引けば下端(ろあしと云ふ)にて水をはねて船を進む。枕草「ろといふ物おして、唄をいみじううたひたる」和名抄「艪、釋名所以進船也」

ろ【驢】(名)【動】ろば(驢馬)の略。

ろろ (助動) らんの音便、らうの略。狂言鸚鵡「子折をを是れは映えやらてよかろ」生玉心中「定めし昨日請け取っつろ」

ろ (助) 命令に用ふる語。よ。「それ見ろ」今宮心中「任かせておけろ」

ろーしや【滷砂】(名)【化】鹵化あんもにうむ・に同じ。

ろーす (英 Roast) (名) 深紅色なる上等の肉。牛などの脊筋の前後の部分の肉。燒肉とするもの。

ろーは (名)【化】りよくばん(綠礬)に同じ。

ろーまかとりっくけうくわい 羅馬加特力教會 (英 Roman catholic church) (名)【宗】西紀一〇五四年基督教會の東西に分裂せるに際し、東方の希臘教會に對して歐洲西部の教會を總括せるものにて、特にかとりっく即ち普遍的なる精神並びに惟一純一の精神を尊重し、法皇最高の支配權を有ち、中央政府をろーま・に置きたるもの。ろーま教會。加持力教會。羅典教會。

ろーまかみつれ (名)【植】ろーまんかみつれ(羅馬加密兒列)の異名。

ろーまけう 羅馬教 (名) ろーまかとりっくけうくわい(羅馬加持力教會)に同じ。

ろーまけうくわい 羅馬教會 (名) 前條に同じ。

ろーまじ 羅馬字 (名) 羅馬國の文字にて、現今歐米の主要なる國にて使用せるもの。ABC等の二十六字より成る。

ろーまじつづり 羅馬字綴 (名) 國語を羅馬字にて發音のまま綴ること。

ろーますうじ 羅馬數字 (名)【數】I(一)・V(五)・X(十)・L(五十)・C(百)・D(五百)・M(千)等の文字の稱。

ろーますうじきすうはふ 羅馬數字記數法 (名)【數】羅馬數字によりて數を記す法。現今計算には用ひざれども、時計の面又は書物の卷數、其の他の階級の番號を記すに用ひらる。而して次の規則に從ふものなり。(I)或る數字の右に、之と等値又は之より劣値の數字あるときは、其の全體は各數字の和を表はし、(II)或る數字の左に之より劣値の數字あるときは、其の全體は各數字の差を表はす。例へば3・4を表はすにはIII; IVとし、6・8を表はすにはVI. VIIIとする如し。又LXXVIIは77を、CCXIは211を表はす如く記するもの。

ろーまはふ 羅馬法 (英 Roman law. 獨 Römisches Recht) (名) 西暦紀元前八世紀の半頃より同紀元後六世紀の半頃に至るまで、羅馬國にて發達したる法律。現今歐米諸國・日本等に行はるる私法の主なる淵源たり。明治二十六年勅令第九十三號「羅馬法」

ろーまんかみつれ 羅馬加密兒列 (名)【植】菊科、羅馬加密兒列屬の多年生草本。葉は細裂し、強き香氣を有す。花は頭狀花序に排列し、周圍の花は舌狀花冠を具へ、中部の花は筒狀花冠を具へて、共に帶白黃色を呈す。西部歐羅巴の原產。此の花を乾かしたるものをろーまんかみつれと稱し、熱湯に浸して飲用して發汗、驅風の藥とす。

ろーまんちっく (英 Romantic) (名) 荒唐無稽なるにいふ語。文藝上にて英雄・神仙などの荒唐無稽なる傳說を取材として、空想また感情に偏重なる敍述にいふ語。

ろーむ (英 Loam) (名) 石英砂・雲母・酸化鐵等の細末を混ぜる粘土。赤土。

ろーらー (英 Roller) (名) 一印刷用具の一。印肉を塗り付けたる棒。ろーる。二地ならしに用ふる機具の一。筒狀の石又は金屬の具にして、中央に軸あり、地上を延轢し、其の重みによりて地を固め平らかならしむるもの。

ろーる (英 Roll) (名) 前條に同じ。

ろーるばんし (名)【──半紙】木の纖維にて製し、偏面に光澤を帶ぶる粗質の洋紙。

ろーるふいるむ (英 Roll film) (名) ふいるむ二を見よ。

ろーれる 老列兒 (英 Laurel) (名)【植】げっけいじゅ(月桂樹)の異名。

ろーんてにす (英 Lawn tennis) (名) てにす・に同じ。

ろあし 艪脚 (名) 一艪をこぐ時、艪の水中にある部分。又、艪を漕ぎ行きたる後に波の立つ痕。二船具、艪の小名。ろ(艪)を見よ。

ろいろ 蠟色 (名) 黑漆にて塗り上げたる上を、角粉(ツノコ)又は朴炭にて磨きて光澤を出だせるもの。

ろう【婁】(名)【天】二十八宿の一。西方にあるもの。二中曆「廿八宿 中略 奎・婁・胃・昴・畢・觜・參」和爾雅「二十八宿 中略 婁(タタラボシ)」史記天官書「婁爲聚衆」

ろう【樓】(名) 一高く重ね造りたる家。宇津保樓上上「ろうはただ樓の花たかどの。二ものみやぐら。三遊女屋・料理屋などを樓とする家。

ろう【漏】(名) 一みづどけい。說文「漏以銅受水、刻節晝夜百刻」二漏刻の略。時の異名。「漏たく」

ろう【籠】(名) ひとや。牢屋。獄舍。太平記二「是れこそ中納言のおはします籠の中よ」運歩色葉「籠(ロウ) 入籠 四人」

ろう【聾】(名) 耳の聞こえざること。つんぼ。左傳僖公廿四年「耳不聽五聲之和曰聾」

ろう【陋】(名) いやしきこと。論語子罕「子欲居九夷、或曰陋如之何」

ろうあ【聾啞】(名) いんあ(瘖啞)に同じ。

ろうえい【漏洩】密事などのもるること。又、祕密などをもらすこと。官吏服務紀律第四條「官の機密を漏洩すること」

ろうえいでんりう【漏洩電流】(名) 電線と電線、又は電線と大地間との絕緣を通じて漏れる電流。

ろうか【樓下】(名) たかどののした。後漢書王允傳「殺吏家十餘口、埋在樓下」

ろうかう【陋巷】(名) いやしきちまた。いぶせきちまた。むさくるしく見苦しき町。論語雍也「一簞食一瓢飲、在陋巷」

ろうかく【樓閣】(名) たかどの。樓臺。太平記廿六「藺相如此の玉を取って樓閣の柱に押しあて」西京雜記「樓閣臺榭、轉相連注」

ろうかく【隴客】(名)【動】あうむ(鸚鵡)の異名。梅聖兪詩「隴客幸相饒」

ろうぎ【螻蟻】(名) けらとありと。小さくつまらぬものの譬へ。戰國策齊「君不聞大魚乎、網不能止、鉤不能牽、蕩而失水、則螻蟻得意」

ろうきよ【樓居】高殿にすまふこと。二階ずまひ。史記孝武本紀「仙人好樓居」

ろうきよ【籠居】家の中にひきこもり居ること。閉居。又、自宅に籠りて謹愼すること。蟄居。保元物語「籠居し給ひけるが」山槐記治承三年四月廿三日「有院勘籠居」

ろうぎよく【弄玉】(名) はんなり(壇破)の異稱。口遊音樂「壇破。一名、弄玉」

ろうく【僂佝】(名) せむし。

ろうぐ【弄具】(名) 玩弄用の物。おもちゃ。玩具。晉書禮志「元帝詔、罷三日弄具」

ろうくわ【弄花】花がるたを弄ぶこと。はなあはせ。

ろうぐわ【弄瓦】〔ぐわ(瓦)は絲まき。下文の詩經の故事より出づ〕女子を生むこと。詩經小雅「乃生女子、載寢之地、載弄之瓦」

ろうくわん【樓觀】(名) 物見のうてな。たかどの。ものみ。後漢書袁紹傳「發騎卒、徒、繕修樓觀、數年乃成」

ろうぐわん【弄丸】たまを種種にあやなすこと。たまとり。しなだま。和名抄雜藝類「弄丸 伊呂波字類抄 弄丸」莊子徐無鬼「市南宜僚弄丸、而兩家之難解」

ろうけ (名) 昔時、西洋より舶來せし酒。閑記或問「上戶にはちんだ・ぶだう酒・ろうけ」

ろうけつ【樓闕】(名) やぐらのある門闕。樓門。史記秦本紀「前有樓闕軒轅」

ろうけつ【漏血】(名) 血の下る痔疾。痔漏。

ろうげつ【朧月】(名) おぼろづき。謠曲老松「朧月松閣の中に映じ」新論「列宿滿天、不及朧月一、光不同也」

ろうげつ【弄月】月を眺めて娛しむこと。太平記一「嘲風弄月に御心を傷めしめ給ふ」陳後主詩「小婦春粧罷、弄月當窗楹」

ろうけん【陋見】(名) いやしき見解。せまき意見。又、自分の見解の謙稱。

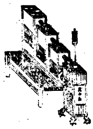
ろうこ【樓鼓】(名) やぐらにて打つ大鼓。又、その音。やぐらだいこ。北史李崇傳「諸州置樓懸鼓、自崇始也」陸游詩「樓鼓驛中日又斜」

ろうこ【漏鼓】(名) 時を知らする大鼓。又、其の音。唐書百官志「凡夜漏盡、擊漏鼓而開」

ろうこ【漏壺】(名) 水時計の水をいるる壺。轉じて、みづどけい。蘇軾詩「夜長耿耿添漏壺」

ろうこ【螻蛄】(名)【動】けら(螻蛄)に同じ。經籍紀「螻蛄の露に鳴しうして、合乳の聲、諳を傳ふ」中華古今注「螻蛄有五能、而不成技術」

ろうこく【漏刻・漏剋】(名) 一古昔、時刻を測る具。銅の壺に水を入れ、底に穴を穿ちて水の漏るやうにし、壺の中に箭を立つ、其の壺を漏壺、其の水を漏水、其の箭を漏箭といふ。一晝夜を四十八刻とし、一時を四刻とす。箭に四十八刻の度を刻み之を漏刻といふ。水漏りて箭の度次第に見え、子の時に刻み一つ見ゆるを子一つ又子の一點、二つ見ゆるを子二つ又子の二點といふ。漏刻博士之を守り居て鐘鼓をうつ、之を時守りといふ。二みづどけい。翔漏。禁祕抄上「上古隨陰陽寮漏剋奏之」周禮夏官「挈壺氏、掌漏刻之官」三漏箭の目盛の稱。


（ろうこく）

ろうこく【鏤刻】ちりばめきざむこと。刻鏤。爾雅釋器「金謂之鏤、木謂之刻」烏臺詩案「蘇軾作詩、賦、并[illegible]等、致有鏤刻印行、各係譏諷誹訕」

ろうこく【漏告】祕密を他人にもらし告ぐること。舊刑法第三百六十條「陰私を漏告したる者」

ろうこくはかせ【漏尅博士】(名) 古昔、陰陽寮の官。守辰丁を率ゐて漏尅の節を伺ひ、時刻を報ずることを掌る。職員令陰陽寮「漏尅博士二人 掌率守辰丁、伺漏尅之節」

ろうさい【弄齋】(名) 次條の略。一代男四「唄へといへば、かしこまって弄齋、其の聲の美しさ」

ろうさいぶし【弄齋節】(名) 弄齋といふ僧の唄ひ初めし小唄の節。三味線又は箏にも合はす。一說、勞瘵といふ病の名なりと。其の唄を聞けば藥用にまさる義と。昔昔物語「百三十年ばかり以前、弄齋といふ遊び坊主、りうたつがことを學び、是れも歌を作りろうさいと附けて唄ふ」寶倉三「くすしも知らぬ煩ひは、らうさいのふしを藥と聞きなし」

ろうさう【綠衫】(名) 〔綠衫(ロクサン)の音便〕一六位の官人の著る綠色の袍。勢語「いと清らかなるろうさうのうへのきぬを見出でて」枕草「ろうさうなりとも、雪にだに濡れなばにくふるまじ」二襖の色目の名。表は紺、裏は蘇芳。一說、裏は紫なりと。

ろうさう【弄槍】(名) 唐樂の名。沙陀調の一。ろさう。伊呂波字類抄「弄槍 音樂調」拾芥抄上樂「沙陀調、弄槍」

ろうし【鏤梓】書籍を木版に付すること。

ろうし【僂指】ゆびをり數ふること。屈指。荀子儒效「雖有聖人之智、未能僂指也」

ろうしう【陋醜】いやしく見にくきこと。醜陋。

ろうしつ【陋室】(名) むさくるしきへや。陋屋。韓詩外傳「彼大儒者、雖隱居窮巷陋室、無置錐之地、而王公不能與爭名矣」

ろうしつ【陋質】(名) いやしき生まれつき。いやしき性質。太平記十四「不恥散木之陋質、竝蹤青雲之高官」曹植文選「以才薄之陋質、奉君子之淸塵」

ろうしつ【漏失】もれおちたること。もらすること。後漢書鄭玄傳「刪裁繁蕪、刊改漏失」

ろうしふ【陋習】(名) いやしき習慣。

ろうしや【聾者】(名) 聽覺の缺けたる人。つんぼ。民法第十一條「聾者啞者」莊子逍遙遊「聾者無以與乎鐘鼓之聲」

ろうしや【籠者】(名) おしこむること。又、おしこめられたる人。入牢せしむること。入牢せしめられたる人。謠曲「若き者を一人籠者させ」

ろうしや【籠舍】(名) 一らうや(牢屋)に同じ。長興宿禰記文明十三年四月廿六日「自去年被置所司代籠舍」二獄に入ること。入牢。甲陽軍鑑廿「御慈悲を加へられ籠舍させ」娥歐加留多「女なれば死罪をゆるして籠舍なり」

ろうしやう【弄璋】〔下文の詩經の故事より出づ〕男子の生まるること。太平記十三「御産平安にして中宮弄璋の御慶天下に聞こえて」詩經小雅「乃生男子、載寢之牀、載衣之裳、載弄之璋」

ろうじやう【樓上】(名) たかどののうへ。蕪村句集夏「川狩や樓上の人の見しり顏」史記平原君世家「從樓上臨而笑之」

ろうじやう【籠城】一城にたてこもること。城に籠もり居て守ること。後愚昧記應安二年九月九日「宇津宮引退籠城了」二轉じて、家にひきこもりて外出せざること。

ろうじゆ【陋儒】(名) いやしき儒者。固陋なる儒者。鄙儒。荀子勸學「末世窮年、不免爲陋儒而已」

ろうしゆく【婁宿】(名)【天】二十八宿の一。西方にあるもの。婁。徒然草「八月十五日・九月十三日は婁宿なり」

ろう-しゅつ 〔漏出〕 もれいづること。もらしいだすこと。後漢書（左雄傳）「地坼震裂、水泉涌出」

ろうしゅん-らく 〔弄春樂〕 (名) ❶しうふうらく（秋風樂）の異稱。樂家錄（廿八、中華白字雜具）「盤涉調、秋風樂（或作）一名、長殿樂。又、弄春樂」 ❷わふうらく（和風樂）の異稱。續教訓抄（雙調）「和風樂（中略）又名、弄春樂」 體源抄（十三ノ下）「和風樂、又名、弄春樂（雙調）」

ろう-しん 〔漏滲〕 もれてしみ出づること。

ろう-す 〔聾〕 (自動變) つんぼになる。耳しふ。

ろう-す 〔弄〕 (他動變) ろうず（弄）に同じ。左傳（定公三年）「君以弄馬之故、隱君身」

ろうず 〔弄〕 (名) 古び又損じたる商品。

ろう-ず 〔弄〕 (他動變) もてあそぶ。あざける。ひやかす。嘲弄す。蜻蛉日記（上下）「御悦びなどおこする人も、かへりてはろうずる心ちして、ゆめ嬉しからず」 源（行幸）「あないとほし、ろうじたるやうにも侍る哉とくるしがり給ふ」

ろう-ず 〔論〕 (他動變) ろんず（論）の音便。公任集「もろともに詠みて、劣り優りをろうじける」

ろうず-もの (名) ろうずとなりたるもの。ろうず。

ろう-すゐ 〔瀧水〕 (名) たきのみづ。たき。平家（二、少將都歸）「山岳の峨峨たるより、百尺の瀧水漲り落ちたり」

ろう-せい 〔漏精〕 精液をもらすこと。太平記（卅七、身子聲聞一角仙人志賀寺上人事）「鹿のつるみけるを見て、婬欲の心ありければ、不覺して漏精したりける」

ろう-せつ 〔漏泄〕 もるること。もれ知るること。鮮顯。もらし知らすること。漢書（鼂錯傳）「漏泄其謀、令相怨咎」

ろう-ぜつ 〔弄舌〕 しゃべること。多言。饒舌。

ろう-せん 〔漏箭〕 (名) 水時計の壺中にありて、時刻を示す矢。又、時刻。ろうこく（漏刻）一を見よ。太平記（廿五、北野通夜物語）「漏箭頻りに遷って、最朝にも成りければ」

ろう-せん 〔樓船〕 (名) 樓のあるふね。やかたぶね。大鏡（冠三）「樓船に乘り移り給へば」 史記（平準書）「大修昆明池、治樓船、高十餘丈」

ろう-せん 〔弄錢　弄泉〕 古錢を愛玩すること。孔方圖鑑（序說）「近歲弄錢の人、偶錢と云へば、強ちに眞に近き者をも棄つ、是れ大に弄錢の意にそむけり」

ろうせん-か 〔弄錢家〕 (名) あいせんか（愛泉家）に同じ。

ろう-ぞく 〔陋俗〕 (名) いやしき風俗。野卑なる風俗。朱熹文（三家禮範跋）「厚彝倫、而新陋俗、其意誠美矣」

ろう-たい 〔陋態〕 (名) いやしげなるさま。みぐるしき姿。醜態。

ろう-だい 〔樓臺〕 (名) たかどのとうてなと。又、屋根ある臺。蘇麟「水に近き樓臺は先づ月を得るなり」 史記（天官書）「海旁蜃氣象樓臺」

ろう-たう 〔籠罩〕 一まとめにすること。とりこむこと。文心雕龍（詮賦）「觀其體說、則籠罩雅頌」

ろう-だつ 〔漏脫〕 だつろう（脫漏）に同じ。南史（吳喜傳）「喜經一見、即寫、無所漏脫」

ろう-だん 〔壟斷〕 〔下文の孟子の故事より出づ〕 高き岡の切れたるところ。轉じて、ひとりじめにすること。獨占。獨擅。太平記（二、關所停止事）「關所（中略）今壟斷の利に依って、商買往來の弊、年貢運送の煩ありとて」 孟子（公孫丑下）「有賤丈夫焉、必求壟斷而登之、以左右望而罔市利、人皆以爲賤」

ろう-ちゅう 〔籠中〕 (名) かごのなか。謠曲（鸚鵡小町）「魂は籠中の鳥の開くを待ちて去るに同じ」 鶡冠子「籠中之鳥、空窺不出」

ろう-ちん 〔弄枕〕 (名) 木枕の齒取り。和漢三才圖會（十六）「一箇有弄枕、以木枕十箇堅相重捧之、恰如一柱、中拔去所好枕、數次皆然焉、有數品弄枕」

ろう-てう 〔籠鳥〕 (名) かごに入れて飼ひおける鳥。拘束せられて自由にならざる譬へ等にいふ語。籠禽。平家（十、八島院宣）中論「獨別親族、已成生捕、籠鳥戀雲思」「斯與籠鳥檻獸、未有異也」

ろう-でん 〔樓殿〕 (名) 樓閣・宮殿。齊書（武帝紀）「起城池樓殿」

ろう-でん 〔漏電〕 電流のもるること。

ろうでん-きしゅんらく 〔弄殿喜春樂〕 (名) きしゅんらく（喜春樂）の異稱。教訓抄（三）「喜春樂（中略）又弄殿喜春樂」 樂家錄（廿八、中華樂具）「黃鐘調、喜春樂（或云）一名、壽心樂、又弄殿喜春樂」

ろう-と 〔漏斗〕 (名) じゃうご（漏斗）に同じ。三才圖會「漏斗鈞升、皆出入權衡之器也、升用以挹、斗用以注」

ろう-とう 〔樓頭〕 (名) ろうじゃう（樓上）に同じ。元稹詩「庾樓今夜月、君豈在樓頭」

ろう-はい 〔僂背〕 (名) 背部のかがまり曲がれること。くぐせ。せむし。

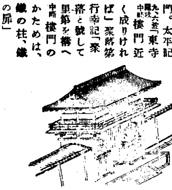
ろう-はん 〔鏤板〕 木版にほこすこと。鏤梓。歐陽修文（題跋）「劉公沆在長沙鏤版、遂布於人閒」

ろう-へい 〔弄兵〕 妄りに兵をもてあそぶこと。やたらに戰爭を起こすこと。杜牧詩「君王若悟治安論、安史何人敢弄兵」

ろう-ほ 〔壟畝〕 (名) ❶はたけ。はた。❷田舍。民間。戰國策（齊）「使曹沫釋其三尺之劍、而操銚鎒、與農人居壟畝之中」

ろう-まう 〔聾盲〕 (名) つんぼと目しひと。莊子（逍遙遊）「豈惟形骸有聾盲哉、夫知亦有之」

ろう-もん 〔樓門〕 (名) 樓のある門。二階造りの門。太平記（九、六波羅攻）「東寺（中略）樓門近く成りければ」 聚落第行幸記「聚落と號して里第を構へ（中略）樓門のかためは、鐵の柱、鐵の扉」



（ろうもん）

ろうや-ばん 〔籠屋番〕 (名) らうやばん（牢屋番）に同じ。京都御役所向大概覺書（二、見座）「見座之儀、以前は洛中見座之家貳拾貳軒より籠屋番相勤め候處」

ろう-らく 〔籠絡〕 人を己れが手の中にまるめこむこと。巧みにいひくるめて、人を自由にあやつること。宋史（胡安國傳）「自蔡京得政、士大夫無不受其籠絡」

ろう-れつ 〔陋劣〕 いやし、劣りたること。鄙劣。蘇軾詩「眞源未純熟、習氣餘陋劣」

ろう-ろ 〔樓櫓〕 (名) ものみやぐら。後漢書（袁紹傳）「上作樓櫓置于塞上、以拒匈奴」

ろう-ろう 〔朧朧〕 (副) おぼろにかすむさま、うすあかるきさまにいふ語。盛衰記（廿八、伊豆）「暮春三の夜を相待つ處に、朧朧として無片雲」 吳融詩「非明非暗朧朧月」

ろう-をく 〔漏屋〕 (名) 雨もりのする家。荀子（議兵）「雖於窮閻漏屋、無置錐之地」

ろう-をく 〔陋屋〕 (名) 見苦しく狹陋なる家。又、己れの家の謙稱。陸游詩「前山雲起忽成暝、陋屋雨來初變寒」

ろ-えい 〔露營〕 野外に陣營をはること。又、その陣營。晉書（劉曜載記）「露營野次」

ろ-えき 〔濾液〕 (名) 【化】濾過法にて濾紙を通過したる液。

ろえふ-だな 〔蘆葉棚〕 (名) がんぎだな（雁木棚）に同じ。

ろ-か 〔艪歌〕 (名) 艪を押しながら唄ふ歌。

ろ-かい 〔艪櫂〕 (名) 艪と櫂と。又、船の兩側の艪櫂を扱ふ處の總稱。最明寺殿百人上﨟（義經記）「海ならば、艪櫂の立たんず處まで」

ろかい の ない 艪櫂無 賴み無きことをいふ、上總國の方言。物類稱呼

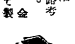
ろかい-せん 〔艪櫂船〕 (名) 船舶の一。艪と櫂とによりて運轉するもの。

ろかい-はり 〔艪櫂張〕 (名) 和船にて左右の臺の間の艪の立たざる所の板張の稱。荷船にては勝棚（せがい）、河船にては桁緣（えだつ）といふ。

ろ-かう 〔魯縞〕 (名) 支那の古への魯國より産出せるうすぎぬ。史記（韓長孺傳）「彊弩之極矢、不能穿魯縞」

ろかう-むすび 〔路考結〕 (名) 俳優二代目瀨川路考の初めたる帶の結び樣。

ろ-かす 〔爐滓〕 (名) 金銅などをるつぼにかけて製煉する時に生ずる滓。灰吹の滓。るかす。



（ろかうむすび）

ろがり (名) 【數】次除の略。

ろがりずむ (英 Logarithm) (名) 【數】たいすう（對數）に同じ。

ろ-がん 〔蘆岸〕 (名) あしの生ひたる岸邊。太平記（四、備後三郎高德事）「暮るれば蘆岸の烟に繫ぐ船、明くれば松江の風に揚ぐ帆」 何遜詩「沙汀暮寂寂、蘆岸晚修修」

ろかん-せき 〔爐甘石〕 (名) 紅亞鉛鑛、菱亞鉛鑛などの異名なるべし。

ろ-き 〔露氣〕 (名) つゆの氣。禮記（月令）「東風解凍」疏「露氣寒將欲凝結」

ろ-きつ 〔盧橘〕 (名) ❶【植】なつみかん（夏蜜柑）に同じ。朗詠「盧橘子低山雨重、栟櫚葉戰水風涼」 司馬相如文（上林賦）「盧橘夏熟」 ❷薰物の名。沈香・丁子香・甲香・甘松香・白檀香・栢木を煉り合はせて作る。拾芥抄

ろ-ぎょ 〔魯魚〕 (名) （魯の字と魚の字と、字形の類似して誤り易きよりいふ）文字の誤りにいふ語。抱朴子「諺曰、書三寫、魚成魯、虛成虎」 祖庭事苑「鋒久厭勞、書刀爲刀、事歷終古、寫魚爲魯」

ろぎょ の あやまり 魯魚誤 ろぎょ（魯魚）に同じ。袋草子（三）「魯魚・章草之誤」

ろ-ぎょ 〔鱸魚〕 (名) 【動】支那、江蘇省松江の名產にて、形は鱸（すずき）に似て巨口細鱗の淡水魚。謠曲（國栖）「蓴菜の羹、鱸魚とても、是れにはいかで勝るべき」 晉書（張翰傳）「因秋風起、乃思吳中菰菜・蓴羹・鱸魚膾」

ろ-ぎん 〔路銀〕 (名) 路用の金。旅費。路費。狂言（山賊）「己れが著てゐる物も路銀も皆おこせ」

ろく (名) むさし（六指）をいふ、大阪の方言。物類稱呼

ろく 〔祿〕 (名) ❶仕官するものの、上より受くる給與。扶持。十訓抄（一）「君をはかりて身の要を構へ（中略）其の祿を望む輩をば深く退くべし」 易經（上經）「君子以施祿及下」 ❷當座の褒美として賜はるもの。かづけもの。大藏省式（十七、賜節）「大射并諸衞射手祿者、一品、一師者內規、調布卅五端、中規卅端、外規廿五端」 宇津保（藏開下）「物かづけ、ろくなんど賜ひて」

ろく の もの ろく（祿）❷に同じ。源（胡蝶）「御ろくの物、上の命婦とりて給ふ、白きおほうちきに御ぞ一くだり例の事なり」

ろく を ぬすむ 竊祿 功績又は器量なくして、みだりに高祿を受く。

ろく を はむ 食祿 祿を受く。

ろく 〔陸〕 (名) ❶物の面・形の正しく整ひたること。❷物事の正しきこと。まじめなること。しみじみ。下に打消しの語を伴ふを例とす。「ろくでない」二代男（三）「切り破りて、ろくに讀みもせず」 緋縮緬卯月紅葉（中）「碌な死をせまいかと、却って是れが不便なり」 丹波與作（中）「己れなら、尤ろくで果てまい奴ぢや」

ろく に すわる 陸坐 次條をいふ、關東の方言。物類稱呼

ろく に ゐる 陸居 あぐらをかく。丈六をかく。たひらにすわる。狂言（大藏流、連歌）「ろくに居さしめ」 同（同、瓜盜人）「ろくに居て、五服も七服もゐまゐりやれ」

ろく 〔勒〕 (名) ろくすること。たづな。又くつわ。說文「馬頭絡銜也、一說、馬鑣也、有銜曰勒」

ろく 〔六〕 (數) 五に一を加へたる數。むつ。む。狂言（大藏流、簺目）「一の裏が六」

ろく-あみだ 〔六阿彌陀〕 (名) 東京及び其の附近にある六箇所の阿彌陀佛。即ち、北豐島郡王子村大字元木の西福寺、南足立郡江北村大字沼田の惠明寺（明治十一年以前は下沼田の延命寺）、北豐島郡瀧野川町大字西が原の無量寺、同町大字田端の與樂寺、下谷區廣小路の長福寺、南葛飾郡龜井戶町の常光寺の稱。春秋の彼岸に歷拜するを六阿彌陀詣でといふ。川柳「六阿彌陀媳の噂の捨て處」

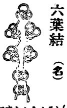
ろく-えう 〔六曜〕 (名) 先勝（センカチ）・友引（トモビキ）・先負（センマケ）・佛滅（ブツメツ）・大安（ダイアン）・赤口（シャクコウ）の六箇の星に當たる日。其の繰り樣は何月とある其の月の星を朔日とし、二日三日と順に繰るものとす。例へば正月十一日の吉凶を知るには、正月が先勝に當たれば此の星を朔日とし、次へ二日三日と數へ、赤口より又先勝へもどり數ふれば、十一日は大安に當たる。安政雜書萬曆大成（孔明六曜日繰）「六曜のくりやうは、何月と有る其の月の星を朔日とし、二日・三日と左へ順にくる也」 醒睡笑（六）「六曜の占」

ろく-えふ 〔六葉〕 (名) 懸魚（ゲギョ）の中央、又は門柱等に用ふる六角形の飾り。

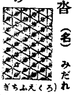
ろくえふ-ぐつ 〔六葉沓〕 (名) みだれを（亂緒）を見よ。

ろくえふ-ちぎり 〔六葉膝〕 (名) 模樣の名。

ろくえふ-むすび 〔六葉結〕 (名) 紐の結び方の名。



（ろくえふむすび）



（ろくえふちぎり）

ろく-か 〔六假〕 (名) 大寶の制、在京の諸司に、六日毎に一日の休暇を給ふこと。即ち、毎月六日・十二日・十八日・二十四日・三十日（小盡の月は二十九日）の五箇日の休暇の稱。令義解（假寧令）「假使謂假寧、除六假」

ろく-がい 〔六骸〕 (名) 首と體と左右の手足との稱。莊子（德充符）「況官天地、府萬物、直寓六骸、象耳目、一知之所知、而心未嘗死者乎」

ろく-がう (名) くぎやう（供饗）をいふ、東國・西國の方言。物類稱呼

ろく-かく 〔鹿角〕 (名) ❶しかのつの。禮記（月令）「仲夏之月、鹿角解、蟬始鳴」 ❷鹿の角の形に枝の岐れたる鐵に柄をつけたる、熊手の如きものなるべし。太閤記（四、利家後攻）「敵鹿角を以て、既に塀を引破らんとす」

ろく-かく 〔六角〕 (名) かどの六つある形。續古事談（五）「此の木を切りて六角の小堂を作りて」

ろくかく-いてふ 〔六角銀杏〕 (名) きっかふいてふ（龜甲銀杏）に同じ。

ろくかく-いなづま 〔六角稻妻〕 (名) きっかふいなづま（龜甲稻妻）に同じ。

ろくかく-けい 〔六角形〕 (名) 【數】ろくへんけい（六邊形）に同じ。

ろくかくごくいん-こばん 〔六角極印小判〕 (名) 古甲州金の一。表に六角の極印、上の六角の内に桐、下の六角の内に菊ありて、裏極印なし。重量四匁。昆陽漫錄（三、甲州金）「六角極印小判、重さ四匁」

ろくかく-さい 〔鹿角砦〕 (名) ろくさい（鹿砦）に同じ。

ろくかく-さい 〔鹿角菜〕 (名) 【植】ふのり（海蘿）に同じ。宋史（地理志）「雷州貢荔枝・鹿角菜・紫菜」

ろくかく-ざさ 〔六角笹〕 (名) 紋所の名。きっかふざさ。

ろくかく-し 〔鹿角芝〕 (名) 【植】かうたけ（茅蕈）の異名なるべし。

ろく-かせん 〔六歌仙〕 (名) 古昔、歌道に秀でて、歌仙と稱せられし在原業平・僧正遍昭・喜撰法師・大友黑主・文屋康秀・小野小町の六人の稱。議志賀「二聖・六歌仙を始めとして其の外の人人」

ろくかん-きん 〔肋間筋〕 (名) 【醫】內外の二つより成る筋肉。外のものは總肋骨を擧上して吸息運動を營み、內のものは之を下降せしめて呼息運動を助く。

ろく-ぎ 〔六義〕 (名) りくぎ（六義）に同じ。

ろく-ぎ 〔六議〕 (名) 王朝時代に於ける刑法上の語。議親・議故・議賢・議能・議功・議貴の六種の資格の稱。即ち、天皇・三后の親族を議親、久しく君側に奉侍して接遇を蒙りたる者を議故、德行の大な

る者を議賢、才藝の大なる者を議能、國家に大功ある者を議功、三位以上を議貴といふ。名例律「六議、一曰議親（謂皇親及皇帝五等以上親、及太皇太后皇太后四等以上親、皇后三等以上親）二曰議故（謂故舊）三曰議賢（謂有大德行）四曰議能（謂有大才藝）五曰議功（謂有大勳功）六曰議貴（謂三位以上）」同「凡六議者犯死罪、皆條所坐及應議之狀、先奏請議、議定奏裁」

ろくきらさう　〔鹿韮草〕（名）【植】ぼたん（牡丹）の異名。

ろくぎやう　〔六行〕（名）　佛語。ろくはらみつ（六波羅蜜）に同じ。盛衰記三（一院女院）「六行雖闕、初侍姑山而承恩、早稱菜名於九九之列」

ろくきゆう　〔六宮〕（名）　りくきゆう（六宮）に同じ。謠曲（楊貴妃）「六宮の玉階に走り上る」

ろくぐ　〔六具〕（名）　六種を以て一揃へとする武具。鎧の六具・身堅めの六具・大將の六具・備への六具・騎兵の六具・戰場の六具・攻戰の六具等の種類あり。諸書異說多し。下文を見よ。今川大雙紙（具足）に付て「六具と云ふは、指懸・鞭・旄・母衣・小旗・扇、是れを六具と云ふ也」天正記（柴田合戰）「六具さしかためたる侍數百人」單騎要略（下）「俗間に六具と稱する品多し、まづ大將の六具は甲冑・直垂・太刀・白旄・籏・團扇、又單騎の六具は甲冑・太刀・鈴・差物・鞭・扇、又步兵の六具は具足・首鎧（カブト）・陣刀・脇指・籠手・脚當、又鎧の六具は頰當・鉢卷・渾懸・佩楯・臑當・小手、又身堅の六具は鉢卷・忍緒・上帶・高紐・緣ト緒・腰當緒是れなりと云ふ、猶異說あれども畢竟は皆具全備の旨なり」

ろくくわ　〔六花〕（名）　りくくわ（六花）に同じ。

ろくくわ　〔漉過〕　こし通すこと。こすこと。漉過。

ろくぐわつ　〔六月〕（名）　年の始めの第一月より第六に當たる月。みなづき。詩經（小雅）「六月棲棲、戎車既飭」（諺）六月無禮　極暑の際には無禮をゆるすとのこと。長門本平家二（西光法師被召捕）「六月無禮とて紐解かせ給へ、入道も白衣に候ぞ」

ろくぐわつぎく　〔六月菊〕（名）【植】しゆんぎく（茼蒿）の異名。

ろくぐわつし　〔六月柿〕（名）【植】たうちさ（菾菜）に同じ。

ろくぐわつゑ　〔六月會〕（名）　だいしこう（大師講）に同じ。榮華（鶴林）「六月會に山にのぼらせ給ひては、傳教大師の御忌日を勸め行はせ給ふ」

ろくくわんおん　〔六觀音〕（名）　佛語。六道に配せる六種の觀世音。即ち、千手（地獄道）・聖（一に正）（餓鬼道）・馬頭（畜生道）・十一面（修羅道）・准胝（一に不空羂索）（人道）・如意輪（天道）の稱。枕九（佛は）「すべて六

觀音」紀略（十、長德元年四月廿七日）「書寫大般若經・六觀音像、可攘疾疫之災」

ろくぐん　〔六軍〕（名）　りくぐん（六軍）に同じ。

ろくけい　〔六經〕（名）　りくけい（六經）に同じ。

ろくげのはくざう　〔六牙白象〕（名）　佛語。普賢菩薩の乘用とせる六つの牙ある白象。盛衰記廿四（都遷事、河原御幸）「六牙の白象に乘じて大會の庭に來給へりと見る人多かりけり、普賢大士の化現といふ事疑ひなし」

ろくけん　〔祿劵〕（名）　秩祿に代へたる公債證書。

ろくこく　〔六穀〕（名）　りくこく（六穀）に同じ。

ろくこくし　〔六國史〕（名）　りくこくし（六國史）に同じ。

ろくこつ　〔肋骨〕（名）　〔一〕【解】細長・弓形にして、後方は胸椎に、前方は肋軟骨を介して胸骨に接する骨。左右各十二箇あり。胸部を作りて、肺・心臟等を擁護す。〔二〕馬の名所。うま（馬）を見よ。

ろくこつきよきん　〔肋骨擧筋〕（名）【解】肋骨を擧上して、吸氣の助けをなす筋肉。

ろくこん　〔六根〕（名）　佛語。人間の惑ひを生ずる六つの根原。即ち眼・耳・鼻・舌・身・意の稱。伊呂波字類（抄）「六根（眼耳鼻舌身意）」法華經科注「以六識緣六塵、徧染六根」

ろくこんざいしやう　〔六根罪障〕　佛語。六根の迷妄によりて作れる罪障。太平記十六（此一）「慚愧懺悔の教主たり、六根罪障の我が爲、何不深仰之哉」

ろくこんさんげ　〔六根懺悔〕　佛語。六根の罪障を懺悔すること。榮華（玉臺）「頓首して聞けば、六根懺悔のわたりなりけり」

ろくこんじざい　〔六根自在〕　佛語。六根の罪障消滅して、無礙自在なること。當流小栗判官三「本心誠を備へては、六根自在の妙ありて」

ろくこんじやう　〔六根淨〕　六根淸淨の略。古事談三「此の上人は得六根淨之人也」

ろくこんしやうじやう　〔六根淸淨〕　佛語。六根の、妄執を斷ちて無礙の妙用を發すること。榮華（鶴林）「明なる眼を開き、六根淸淨を得たりと覺え」智度論「六根淸淨、善欲心生」

ろくごん　〔六言〕（名）　六字にて一句を成す詩の一體。艸山集十八（六言附）「爲六言三章、繫節云」文體明辨「按六言詩昉於漢司農谷永」

ろくざ　〔六座〕（名）　左右の大・中・少辨の稱。讃岐典侍日記下「惟成の辨を、入道殿一條院にわたりて、もとの如くろくざにてつかはれんと仰せられけるを」

ろくさい　〔六采〕（名）　すごろく（雙六）に同じ。和名抄（雜藝具）「雙六子、一名、六采（本名六采、北胡戲也）」

ろくさい　〔六齋〕（名）　〔一〕ろくさいにち（六齋日）の略。聖德太子傳曆「月八日・十四日・十五日・廿三日・廿九日・卅日、是爲六齋、此日梵天帝釋降見國政、故禁殺生、是仁之甚也」涅槃經「年常三長月恆六齋、蔬菜節味」〔二〕一箇月の中に一・六・二・七・三・八日など、日數六日を定めて市を爲すこと。上杉綱年文書「市之日、三日・八日、六齋たるべき事」一代女五「月に六齋の夜間男」

ろくさい　〔鹿砦・鹿寨〕（名）　さかもぎ（逆茂木）に同じ。

ろくさいにち　〔六齋日〕（名）　佛語。毎月八・十四・十五・廿三・廿九・卅日の稱。是の日は梵天帝釋の國政を見る日、又惡鬼の人を伺ふ日なりとて、事を愼み齋戒するものとす。令義解（雜）「凡月六齋日、公私皆斷殺生（謂六齋、八日・十四日・十五日・廿三日・廿九日・卅日）」智度論「問何故六齋日受八戒修福德、答、是日惡鬼逐人、欲奪人命、疾病凶衰、令人不吉、是故劫初聖人教人、持齋修善」

ろくさいねんぶつ　〔六齋念佛〕（名）　佛語。六齋日に空也念佛をすること。空也上人繪詞傳下「毎月齋日ごとに、太鼓鐘をたたき念佛唱へ、衆生を勸め給ひて、往生する人のある時は太鼓・鐘をたたきて念佛を申し、有緣無緣の弔ひをなし給ふなり、是れに依りて俗呼びて六齋念佛といひ傳へたり」

ろくさう　〔葎草〕（名）【植】むぐら（葎）に同じ。

ろくさう　〔綠藻〕（名）【植】りよくさう（綠藻）に同じ。

ろくざう　〔六藏〕（名）　うまかた。まご。俳諧六日飛脚「鼾こすや六藏がひく朝霞」

ろくさん　〔綠衫〕（名）　ろうさう（綠衫）を見よ。

ろくし　〔籙子〕（名）　竹を編みて造れる箱。主鈴式「驛鈴傳符等、皆納漆籙子」

ろくし　〔六師〕（名）　りくし（六師）に同じ。

ろくし　〔祿仕〕　俸祿を得ん爲めに官に就くこと。庾信文（擬連珠）「本不達于危行、又無情于祿仕」

ろくじ　〔錄事〕（名）　〔一〕大寶の制、軍の主典。兵士一萬人毎に四人を置き、軍中の雜務を監察することを掌るもの。軍防令「凡將帥出征、兵滿一萬人以上、（中略）軍曹四人、錄事四人」〔二〕遣唐使の下役。續紀（卅五、寶龜九年六月辛巳）「以正四位下佐伯宿禰今毛人爲遣唐大使（中略）判官・錄事各四人」〔三〕公事にて饗宴を行はるる時、侍從の座に酒を勸めに行く役。江次第（六、二）「上卿

揖之、召仰錄事可奉仕由」〔四〕軍法會議及び同會議を設くる以前に置かれし陸軍裁判所を構成する判任文官。法廷に立會ひ、調書の作成・訊問・供述の記錄など、其の職務は略ぼ通常裁判所の裁判所書記に同じ。陸軍裁判所には大・中・少の三等あり。明治五年四月九日太政官布告「大錄事」同「中錄事」同「少錄事」陸軍治罪法（第十條）「軍法會議は（中略）理事試補及び錄事を以て構成す」〔五〕陸軍省・海軍省・陸軍法官部及び宮内省・御歌所の職員。庶務に從事する判任官。陸軍省官制（附則）「錄事」海軍省官制（第十五條）「海軍省に（中略）錄事を置き」御歌所官制（第二條）「御歌所に左の職員を置く（中略）錄事」

ろくじ　〔六字〕（名）　佛語。南無阿彌陀佛の六字の名號。盛衰記廿九（平家落、維盛出家）「行をも六字につづめて、愚癡暗鈍も唱へらるるに便あり」

ろくじのみやうがう　〔六字名號〕　佛語。淨土宗にて南無阿彌陀佛の六字の稱。謠曲（誓願寺）「上人の御手跡にて、六字の名號になして賜はり候へ」

ろくじ　〔六時〕（名）　晨朝・日中・日沒・初夜・中夜・後夜の稱。宇津保（貴宮）「穀を絕ち離たちて、木の實・松の葉をすきて、六時まなく行ひて」阿彌陀經「晝夜六時、而雨曼陀羅華」

ろくじさんまい　〔六時三昧〕　佛語。晝夜六時に念佛など專心に勸むること。盛衰記二（淸水寺）「賢心此に住して、六時三昧怠らず」

ろくじのつとめ　〔六時勤〕　佛語。晝夜六時に念佛・誦經などを勸め行ふこと。源明石「晝夜の六時のつとめに、みづからの蓮の上の願ひをばさる物にて」

ろくじのらいさん　〔六時禮讚〕　佛語。晝夜六時に佛を禮讚するを勸むること。徒然草（二二七）「六時禮讚は法然上人の弟子安樂といひける僧、經文を集めて造りて勤めにしけり」法然上人行狀畫圖三「上人の門徒住蓮・安樂等のともがら（中略）六時禮讚を勤む、定まれる節拍子なく、各哀歎悲喜の音曲をなすさま、珍しく尊かりければ」

ろくじう　〔六獸〕（名）　兕・鹿・狼・兔・野豚・豬の六種の獸類。

ろくしうかんげんえきへい　〔六週間現役兵〕（名）　滿十七歲以上滿廿八歲以下にて官立・府縣立師範學校の卒業證書を有し、官立・公立の小學校の教職に在るものが、其の教職に就きたる年か又は其の翌年かに六週間服役する陸軍現役兵。陸軍六週間現役兵條例「六週間現役兵」

ろくじかりんぼふ　〔六字河臨法〕（名）　佛語。船を河上に浮かべて壇を建て修法する法。六觀音を本尊とし、

調伏と息災とを修する修法。平家三（頼豪）「五大虛空藏・六觀音・一字金輪五壇の法・六字河臨・八字文殊、普賢・延命に至る迄」

ろくしき　〔六識〕（名）　佛語。六根より生ずる六種の作用。即ち、眼・耳・鼻・舌・身・意の知覺の稱。日本武尊吾妻鑑三「六根・六識を惱亂し」梁簡文帝文（莊嚴論序）「悲哉六識沈淪八苦」

ろくじく　〔六字供〕（名）　ろくじほふ（六字法）に同じ。東鑑（卅六、寬元三年六月十四日）「爲大納言家御祈、被修六字供」

ろくじだう　〔六時堂〕（名）　佛語。晝夜六時に佛道を修行する堂舍。徒然草「太子の御時の圖、今に侍るを博士とす、いはゆる六時堂の前の鐘なり」

ろくじなむゑもんぶし　〔六字南無衞門節〕（名）　慶長の頃、女淨瑠璃太夫六字南無右衞門の語り出だせしといふ淨瑠璃節。本朝二十不孝三「六字南無右衞門節の淨瑠璃を語るもあり」

ろくじふ　〔六十〕（數）　〔一〕十の六倍。六の十倍。むそ。〔二〕年の數、六十。六十歲。六十年。むそぢ。むそ。（諺）六十の手習　晚學の譬へ。犬子集上「きこんにもするは手習の句に六十になれど心は若やぎて」

ろくじふちやうだて　〔六十挺立〕（名）　船の名。せきぶね（關船）を見よ。

ろくじふしちやうだて　〔六拾四挺立〕（名）　船の名。せきぶね（關船）を見よ。

ろくじふにちやうだて　〔六拾貳挺立〕（名）　船の名。せきぶね（關船）を見よ。

ろくじふはつちやうだて　〔六拾八挺立〕（名）　船の名。せきぶね（關船）を見よ。

ろくじふぶんはふ　〔六拾分法〕（名）【數】度・分・秒を單位として角を測る法。一度は直角の六十分の一、一分は一度の六十分の一、一秒は一分の六十分の一なり。

ろくじふろくこくそうつゐぶし　〔六十六國總追捕使〕（名）　しよこくそうつゐぶし（諸國總追捕使）に同じ。

ろくじふろくちやうだて　〔六拾六挺立〕（名）　船の名。せきぶね（關船）を見よ。

ろくじふろくぶ　〔六十六部〕（名）　〔法華經六十六部を書寫し、日本六十六箇國を遍歷して、各一部を靈場に納めしより起こる〕　佛語。諸國を巡りて神佛に順禮する修行者。近代のは男女ともに鼠木綿の服を着、手おほひ・股引・脚半・甲掛皆同色にて、帶の前に鉦を付け或ひは手に鈴を振り、或ひは厨子入の佛像を負ひて錢を乞ひあるく。六部。甲陽軍鑑三「六十六部の聖とつれて、奧州・出羽・關東其の外所所を修行し給ふ」西遊雜記三「六十六部の修行者に身をやつして、關所にか

かりし故に」

ろくじふろくぶなふきやうにん　〔六十六部納經人〕（名）　佛語。六十六部の法華經を書寫して六十六箇國を遍歷し、國國の有名なる一寺に納むる人。眞俗佛事編三「廻國納經（六十六部納經人、今世稱之六部、是れ梶原政前生納經の事より起これり）」

ろくじほふ　〔六字法〕（名）　佛語。六觀音を本尊として修する修法。將鎮下「六字法は聖淨僧正」

ろくしや　〔錄寫〕　文書をうつししるすこと。

ろくじや　〔六蛇〕（名）　ろくじやにち（六蛇日）の略。具注曆「四箇惡日、春八龍（甲子・乙亥）、夏七鳥（丙子・丁亥）、秋九虎（庚子・辛亥）、冬六蛇（壬子・癸亥）」

ろくしやう　〔祿賞〕（名）　封祿と賞賜と。太平記十三（聖廟）「官位・祿賞共に菅亞相に被給ひければ、御憤更無休時」

ろくしやう　〔綠青〕（名）　〔一〕【化】銅又は青銅製の器物等に生ずる綠青色の銹。化學成分は鹽基性炭酸銅（$CuCO_3 \cdot Cu(OH)_2$）。綠色の顏料とす。有毒なり。天然のものを岩綠青といひ、孔雀石の類これなり。和名抄「綠青、一名、碧青（綠青）」狂言「蓮の葉の青きが上の青蛙（中略）ろくしやう塗れる佛とぞ見る」〔二〕ろくしやういろ（綠青色）の略。宇津保（吹上）「紺青・ろくしやう（の）玉」

ろくじやう　〔六情〕（名）　りくじやう（六情）に同じ。

ろくしやういろ　〔綠青色〕（名）　綠青の如き色。

ろくしやく　〔六尺・陸尺〕（名）　〔一〕〔力者（リヨクシヤ）の訛りといふ（嬉遊笑覽）〕貴人の輿を舁くもの。かごかき。〔二〕江戶幕府の職名。御用部屋・御臺所等に屬し驅使に從事したる下部。吏徵「紅葉山御高盛六尺廿人（中略）御賄六尺三百八十八人（中略）西丸御賄六尺百十三人（中略）奧六尺五十人」〔三〕ろくしやくぼう（六尺棒）の略。

ろくしやく　〔漉酌・六尺〕（名）　〔一〕造酒屋の下部をいふ、京都の方言。（物類稱呼）〔二〕造酒屋にて桶の大なるものをいふ、東國の方言。（物類稱呼）

ろくしやくおび　〔六尺帶〕（名）　二重廻しの兵兒帶（ヘコオビ）。守貞漫稿（十五、男子帶）「三尺帶・六尺帶には、木綿の半糊染を專とせしが、近年廢してより今はむきみ絞り・柳絞り等を專とす」

ろくしやくがしら　〔六尺頭〕（名）　江戶幕府の賄方などの六尺の長。持高、役切米七俵、二半場、役上下とす。吏徵下「御賄六尺頭四人（中略）西丸御賄六尺頭三人」

ろくしやくきふまい　〔六尺給米〕（名）　江戶幕府にて課したる三役の一。幕府の臺所などにて召し使ふ六尺に給する扶持米を料地の高に積もり合はせ、高百石

につき米貳斗の割合にて、百姓より金納又は米納せしめたる小物成。地方凡例錄（五、三）「御料所村村御傳馬宿入用米・六尺給米・御藏前入用、是れを三役といふて高懸りに而納む」同（同同）「六尺納米は、高百石に付米貳斗づつ納む」

ろくしやく‐そで　六尺袖　（名）　大振袖の稱。長さ一尺五寸なるもの。近世奇跡考「延寶・天和の頃までは一尺五寸を大振袖といふ、たんだ振れ振れ六尺袖をと謡ひしは其の頃の事とぞ、一尺五寸、四つ合はせて六尺袖なり」

ろくしやく‐づつみ　六尺裹　（名）　駕籠舁の常になす鉢卷、又は頰かぶり。源氏冷泉節（三）「後屑は此の法眼と、坊主天窓の六尺づつみ」

ろくしやく‐の‐こ　六尺孤　（名）　〔支那にて古代二歲半を以て一尺とすれば、六尺は年十五なりと。（朗讀）〕　幼少にして父を失ひたる君。論語（泰伯）「可以託六尺之孤、可以寄百里之命」

ろくしやく‐ぼう　六尺棒　（名）　㊀長さ六尺の棒。樫などにて作り、防禦の用とす。㊁てんびんぼう（天秤棒）をいふ。九州の方言。（物類稱呼）

ろくじや‐にち　六蛇日　（名）　陰陽家にていふ四季の惡日の一。冬の壬子と癸亥との日。萬事に用ひて凶なりと。六蛇。下文を見よ。簠簋內傳（三）「四季惡日（中略）冬壬子、癸亥、六蛇日（六蛇同、以上）」曆林問答集（下、釋三八龍・七鳥・九虎・六蛇）「春甲子・乙亥爲八龍日（中略）冬壬子・癸亥爲六蛇日、今按、春木王、甲乙木也、子者十二支之首、亥者十二支之終、故甲子・乙亥春八龍日也、八木數也、龍東方靑龍之故也（中略）冬水王、壬癸水也、子亥如前、故壬子・癸亥冬六蛇日也、六水之數也、蛇北方玄武之故也、蛇配於龜、龜玄武故也、其四季皆凶也、百事莫用之」

ろく‐しゆ　六趣　（名）　ろくだう（六道）に同じ。榮華（鳥舞）「六趣に輪廻する事あらじと、たのもしくなりぬ」法華經（方便品）「以諸欲因緣、墜三惡道、輪廻六趣中、備受諸苦楚」

ろく‐しゆう　六宗　（名）　佛語。奈良朝時代にありし佛教中の六つの宗派。華嚴・律・三論・法相・成實・倶舍の稱。類聚國史（百七十九、延曆廿一年正月庚午）「正月最勝王經幷十月維摩經二會、宜請六宗以廣學業」

ろくしゆ‐きん　漉酒巾　（名）　〔下文の陶淵明の故事より出づ〕　酒を漉す頭巾。唐船噺今國姓爺（中）「陶淵明が漉酒巾、四明大師の律衣を著し」晉書（陶淵明傳）「淵明每酒熟、取頭上角巾漉酒、畢復著之」

ろくしゆ‐くぐ　六種供具　（名）　佛語。佛を供養する六種の供具。即ち、華・塗香・水・燒香・飯食・燈明の總稱。眞俗佛事編（三）「六種供具事（華・塗香・水・燒香・飯食・燈明也、此六波羅蜜を表す、水は檀那波羅蜜を表す、塗香は戒波羅蜜也、塗香は能く垢を除くに喩ふ、華は忍辱波羅蜜也、花を以て喩ふるものなし、故に忍に喩ふ、食は禪那波羅蜜也、食は般若に喩ふ、智能く明了に物を照らして見する、燈光の如し、燒香は精進に喩ふ、香の燃ゆるは此れ動きて息む事なし）」

ろくしゆ‐しんどう　六種震動　（名）　佛語。佛の入胎の時、出胎の時、出家の時、成道の時、法輪を轉ぜし時、入滅の時の六時に、大地の震動せしといふこと。義經記（四、土佐坊義經の討手に上る事）「大庭の馬の足音、六しゆ震動の如し」曾我（九、十番斬）「某・かれがしと罵る音は、唯六種震動にも劣らず」

ろく‐しゆつ　六出　（名）　りくしゆつ（六出）に同じ。

ろくしゆ‐でんせんびやう　六種傳染病　（名）　麻疹（ハシカ）・疱瘡（ハウサウ）・これら・腸ちぶす・ぢふてりや・赤痢の稱。

ろくしゆ‐どう　六種動　（名）　佛語。ろくしゆしんどう（六種震動）に同じ。榮華（鳥舞）「若法龍池之籥六種動以涌出賦」

ろく‐しよ　祿所　（名）　節會などの時、王卿已下に賜ふ祿を、大藏より持ち來たりて積み置く所。江次第（十六、大嘗會）「參議就祿所」建武年中行事（上、白馬節會）「群臣祿所に向かふ、祿をとる」

ろく‐しよ　六處　（名）　佛語。十二因緣の一。六根を生ずること。

ろく‐じよう　鹿茸　（名）　㊀鹿のふくろづの。一說、鹿の胃肉を干したるものと。（徒然草諸抄大成）徒然草「鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず」本草「鹿茸味甘溫、無毒」㊁ろくでうとうふ（六條豆腐）に同じ。下文を見よ。雍州府志（六）「鹿茸、豆腐薄截之、板面盛灰、隔紙並置豆腐、取水氣傳鹽少許而陰乾、或剉之或劉之、浸酒而食之、其始形色似鹿茸故名之、一說六條邊人始製之、六條鹿茸俗語相同、故彼此互稱之」

ろく‐しようじ　六勝寺　（名）　白河天皇より近衞天皇までの代代の天皇、及び鳥羽天皇の中宮待賢門院の山城國愛宕郡に建立して、勝の字の付きたる六箇の寺。即ち、承曆元年白河天皇の建立せる法勝寺、康和四年堀河天皇の建立せる尊勝寺、元永元年鳥羽天皇の建立せる最勝寺、大治三年鳥羽天皇の中宮待賢門院の建立せる圓勝寺、保延五年崇德天皇の建立せる成勝寺、久壽二年近衞天皇の建立せる延勝寺の總稱。愚管抄（四）「白河に法勝寺たてられて、國王の氏寺に是れをもてなされけるより、代代皆此の御願を造られて六勝寺といふ、白河の御堂大伽藍うちつづきありけり、堀河の院は尊勝寺、鳥羽院は最勝寺、崇德院は成勝寺、近衞院は延勝寺、これ迄にて後はなし、后にて待賢門院圓勝寺を加へて六勝寺といふなるべし」

ろくしよ‐をんる　六所遠流　（名）　江戸時代、遠流に處すべき罪人を送る六箇所の地。即ち、伊豆の七島、薩摩の五島、肥後の天草、隱岐・壹岐・佐渡の稱。

ろく‐しん　六親　（名）　りくしん（六親）に同じ。

ろく‐じん　六壬　（名）　次條の略。二占要略（下、大六壬占）「六壬の占法は、天盤の十二神（月將）と地盤の十二支と合はするに、四課三傳の法を立て、五行の生克を考へ、兵戰及び萬事の吉凶を占ふ事なり、直鈔按ずるに、此の法六甲六十圖の生克を以て判斷するなれば六甲占と云ふべき所を、さは名づけずして六壬と云ふ所以の者は、蓋し天一の水を始めとし、月將貴神ともに、壬水亥より逆行順行に數を取りて占ふ故にしかいへるならん」

ろくじん‐うらなひ　六壬卜　（名）　年・月・日・時及び行年・方位の干支を推し、四課（日辰の陰陽）十二將・十二神を辨じて吉凶を占ふもの。六壬。六壬式。北山抄（六、軒廊御卜）「六壬卜何又不快、非急事者、改日共令奉仕可宜」江談抄（三）「六壬占、天番二十八宿、可在天向在地番、不番事」

ろくじん‐しき　六壬式　（名）　前條に同じ。唐六典（十四、凡式占辨三式之同異）「三日六壬式、士庶通用之」

ろく‐じんづう　六神通　（名）　ろくつう（六通）に同じ。雪女五枚羽子板「六神通の阿羅漢も遁れつべうはなかりけり」一代經律論釋法數「六神通（法界次第）一天眼通、二天耳通、三知他心通、四宿命通、五身如意通、六漏盡通」

ろく‐しんとう　六親等　（名）　世數六を隔てたる親等。しんとう（親等）を見よ。民法（第七百三十五條）「六親等內の血族」

ろく‐す　錄　（他動）　㊀かきしるす。記載す。うつす。公羊傳（隱公十年）「春秋錄內而略外」㊁とり扱ふ。統ぶ。

ろく‐す　勒　（他動）　㊀おさふ。ひかふ。㊁とりしまる。すぶ。ひきゐる。統御す。史記（封禪書）「化巡朔方、勒兵十餘萬」㊂きざむ。彫りつく。梁簡文帝文（昭明太子集序）「翠石勒文」、四勒韻（ロクキン）をなす。菅家文草（五）「賦葉落庭柯空（勒公・從・籠・松・容・封・風・聲・鐘・蹤・逢・峰・窮・衝・濃・中）」唐詩紀事（儀文人相聚、欽…）「麗正殿賜宴、同勒天・前・煙・年四韻、應制」

ろく‐ずみ　陸墨　（名）　水平を示す器。すみなは。

ろく‐せい　祿制　（名）　秩祿の制度。明治三年十一月御沙汰「家祿之制を始め士卒祿制に至る迄被定候」

ろく‐せいけい　六正刑　（名）　六種の正刑。即ち、武家時代に於ける禁獄・追放・流罪・斬罪・梟首・磔の稱。

ろく‐そう　六窗　（名）　佛語。六根を六つのまどに譬へていふ語。謠（盛久）「六窗いまだあげざるに、耿然たる一天」

ろく‐ぞく　六賊　（名）　佛語。ろくぢん（六塵）に同じ。

ろくそく‐ちゆうるゐ　六足蟲類　（名）　【動】こんちゆうるゐ（昆蟲類）に同じ。

ろく‐そつぽう　（名、副）　ろくに。あまり。ただしく。浮世床（上）「孔子の道はおいて王子の道も、ろくそつぽうにやあ知るめえ」

ろくそん‐しやう　祿存星　（名）　北斗七星の一。

ろく‐たい　綠苔　（名）　㊀みどり色のこけ。りよくたい。㊁浮紋ある織物。下文を見よ。增鏡（中）「紫のろくたいの半尻」口傳抄「ろくたゐ、地はくれない、文は浮きて白し」

ろく‐たい　六體　（名）　㊀和歌の六種の體。即ち、長歌・短歌・旋頭歌・混本歌・折句・沓冠の稱。簾中抄（下）「六體、歌のやうは六つなり」㊁りくしよ（六書）に同じ。

ろく‐だい　六大　（名）　佛語。地・水・火・風・空・識の稱。

ろくだい‐むげ　六大無礙　佛語。六大の互ひに融通して障礙なきこと。太平記（卅九、光嚴院禪定法皇行脚事）「六大無礙の月晴るる時有つて、四曼相卽の花可發春を待ちけり」

ろく‐だいし　六大師　（名）　佛語。十八大師の中、特に弘法・傳教・慈覺・智證・慈慧・圓光の稱。

ろく‐だう　六道　（名）　㊀佛語。善惡の業因によりて必ず到るべき六種の境界。即ち、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の稱。六趣。源（鈴蟲）「經は六道の衆生のために六部書かせ給ひて」㊁むさし（六指）をいふ。和泉・尾張・上野・陸奧の方言。（物類稱呼）

ろくだう‐ししやう　六道四生　佛語。六道の中に胎生・卵生・濕生・化生の四生あること。卯月潤色（中）「內外六根淸淨とは世に亡き魂の道しるべ、六道四生の淨めぞかし」

ろくだう‐のうげ　六道能化　佛語。〔六道のちまたにありて死人を引導するよりいふ〕地藏菩薩の異稱。謠（卒都婆小町）「南無や地藏大菩薩、六道能化にてましませば、迷ひの衆生を導き給へ」

ろくだう‐の‐ちまた　六道衢　次條に同じ。保元（義朝幼弟悉被誅事）「六道の衢にて必ず待合奉るべく候ふ」

ろくだう‐の‐つじ　六道辻　六道に行くつじ。六道の分岐點。狂言（ぬらし十王）「はや六道の辻について御座る」

（諺）六道は目の前　六道の何れに落つるも、現世の行爲の如何による。和漢故事要言「六道は目の前」

ろくだう‐せん　六道錢　（名）　死人を葬るとき棺の中に入るる錢。死人の三途川を渡る時に拂ふべきものといふ。一代女（六）「鬼に六道錢を取らるる如く思ひぬ」經濟錄（五、食貨）「民間にて人を葬るに六道錢と名づけて、錢六文を棺中に入るる事あり」

ろくだう‐ぢ　六道路　（名）　むさし（六指）をいふ。越後國の方言。（物類稱呼）

ろくだう‐の‐き　（名）　【植】ひとつばたごの異名。

ろくだう‐ぼく　（名）　【植】前條に同じ。

ろくだう‐まゐり　六道參　（名）　昔時、七月九日、京都愛宕郡六道の珍皇寺に參詣せしこと。改正月令博物筌（七月）「九日（京都）六道參（轆轤・鋤・迎鐘、建仁寺の南にある六道の珍皇寺といへる寺へ參るを云ふなり、今日明日、諸人此所に詣でて、聖靈を迎ふるといふて此の寺の鐘をつく、是れを迎鐘といへり）」

ろくだう‐みやうくわん‐さい　六道冥官祭　（名）　てんさうちふさい（天曹地府祭）に同じ。伊呂波字類「天曹地府祭（一名、六道冥官祭、以御衣一祭之）」

ろくだう‐りんゑ　六道輪廻　（名）　佛語。るてんりんゑ（流轉輪廻）に同じ。るてん（流轉）の條を見よ。

ろく‐だか　祿高　（名）　給與せらるる俸祿の高。

ろくだか‐せいりこうさい　祿高整理公債　（名）　我が國の國債の一。金祿公債證書交付の際、祿高に對する全部の給與を受けず又は錯誤ありたるを整理するため、明治廿八年十一月に募集せるもの。其の發行する公債證書は大日本帝國政府五分利公債證書とす。明治四十三年七月全部償還せられたり。明治三十八年大藏省令第五十二號「祿高整理公債發行」

ろく‐だま　（名、副）　ろくに。ろくろく。ろくそつぽう。

ろく‐たん　六反　（名）　つりながしぶね（釣流船）を見よ。

ろくだん‐め　六段目　（名）　〔昔の淨瑠璃は六段を切りとせしより出づ〕是れぎり。終末。還魂紙料（上）「昔の淨瑠璃はすべて六段なり（中略）故に何にもあれ、是れぎりといふ程の事を六段目ぢやなどいふ諺、今もまれにいふものあり」

ろく‐ぢ　陸地　（名）　くが。りくち。謠（藤戸）「御舟の陸地に著くべき樣もなし」源氏十二段長生島臺（五）「蹄に草の葉を踏んでも、ろく地を行くより猶易し」

ろく‐ちく　六畜　（名）　〔畜は家に養ふ禽獸〕　馬・牛・羊・犬・豕・雞の稱。沙石集（七）「六畜これなければなきことをうれへ」爾雅「畜馬牛羊豕犬雞、謂之六畜」

ろく‐ぢざう　六地藏　（名）　佛語。㊀地藏菩薩を六道に配置したるもの。即ち、延命・寶處・寶手・持地・寶印・堅固意の稱。沙石集（一）「六觀音・六地藏と成り給ふ」書言字考節用（十）「六地藏（ロクヂザウ）（延命・寶處・寶手・持地・寶印・堅固意）」㊁六箇所に安置せる地藏。資益王記（文明十四年七月廿四日）「參六地藏、所謂西院（高西寺）・壬生・八田・屋彌（星光寺）・淸和院・正親町西洞院（誓願寺）」江戸砂子（三）「醫王山眞性寺、御府末（中略）地藏坊正元御師建立、唐銅六地藏の三番目也」

ろく‐ちつ　祿秩　（名）　ちつろく（秩祿）に同じ。禮記（月令）「季秋之月、收祿秩之不當、供養之不宜者」

ろくちやう‐だち　六挺立　（名）　次條に同じ。

ろくちやう‐だて　六挺立　（名）　船名。こばや（小早）㊂を見よ。

ろくぢやう‐ほそぬの　六丈細布　（名）　細布の一種。一疋の長さ六丈ありしよりいふなるべし。今昔（廿八）「白き六丈の細布段」

ろくちやう‐め　六丁目　（名）　ぴんよを見よ。

ろく‐ぢん　六塵　（名）　佛語。佛心をけがす六種のもの。即ち、色・聲・香・味・觸・法の稱。六賊。謠（江口）「皆人は六塵の境に迷ひ、六根の罪を作る事」金剛經「於此六塵、起憎惡心」

ろく‐つう　六通　（名）　佛語。六つの通力。即ち、自身また境界の變現自在なる力、天眼にて照らし觀ることの無礙なる力、天耳にて聽聞の無礙なる力、他人の心念を知るに無礙なる力、衆生の宿世を知るに無礙なる力、一切の煩惱を斷つ無礙なる力の稱。榮華（玉臺）「六通三明そへたり」法界次第（中之下）「一天眼通、二天耳通、三知他心通、四宿命通、五身如意通、六漏盡通」

ろくてい‐さう　鹿蹄草　（名）　【植】いちやくさう（鹿蹄草）に同じ。

ろくていさう‐くわ　鹿蹄草科　（名）　【植】いちやくさうくわ（鹿蹄草科）の異名。

ろくてい‐らん　鹿蹄蘭　（名）　【植】いちえふらん（一葉蘭）の異名。

ろく‐でう　六條　（名）　ろくでうどうふ（六條豆腐）の略。書言字考節用（六）「六條（ロクデウ）（水氣一路乾者、蓋京師六條邊人始所製、故名）」本朝食鑑（二）「豆腐（中略）有六條者、切豆腐作條片、晒乾經日、俟略堅乾、細切作薄片而用之」

ろく‐てうし　六調子　（名）　音樂に六つの調子。即ち、大食調・壹越調・平調・雙調・黃鐘調・盤渉調の總稱。龍鳴抄（上）「音（中略）六てうしといふことあり、いはゆる大食調を加へたる也」

ろくでう‐どうふ　六條豆腐　（名）　〔初め京都の六條にて製出したるよりいふ〕　豆腐を薄く切りて鹽に塗し、陰乾したる黃白色なるもの。刻み又は削りて酒に浸し、又は吸物に加へ用ふ。六條。

ろく‐でなし　（名）　役に立たぬもの。み以下のもの。のらくらもの。

ろくてん‐ゑん　六點圓　（名）　【數】三角形の類似重心を過ぎりて各邊に逆平行に引きたる直線が、邊と交はる六つの點は同一圓周上にあり。此の圓を六點圓と云ふ。餘弦圓。

ろく‐ど　六度　（名）　㊀ろくはらみつ（六波羅蜜）に同じ。十訓（下）「六度の中には忍辱波羅蜜とも稱し」㊁京阪にて錢を賭する一種の戲。（守貞漫稿）

ろく-とう （名） 琵琶の名所。びは（琵琶）を見よ。

ろく-なんこつ 肋軟骨 （名） 【醫】前胸壁にありて、胸骨と肋骨とを聯接せる彈力強く、扁平なる骨。肋骨と同數。呼吸に作ふ胸部の擴縮に便す。

ろく-ぬすびと 祿盜人 （名） 其職或ひは功績なくして、空しく高祿を受くる者を罵り云ふ語。川中島合戰「母孫行とて身をかばへば、祿盜人の不忠者」

ろく-ば 六馬 （名） りくば（六馬）に同じ。

ろく-ばう 六方 （名） 一 東・西・南・北・上・下の稱。彌陀經「稱讚六方諸佛、爲稱讚淨土佛」 二 六箇の平面を以て圍まれたる立體。三 萬治・寛文の頃、江戸にありし俠客の六團體。即ち、鐵砲組・笊籬組・大小の神祇組・鶺鴒組・吉屋組・唐犬組の稱。之を六方男達ともいひ、市中を排徊して威を振ひしもの。四 芝居にて役者が舞臺より花道を經て揚幕に入る時、手を振り高く足踏みして行く一種の足踏み方の稱。丹前。佐渡島日記「六法といふ風俗は、むかし信州歷歷の武門より出でたる人、伎藝を好みてつひに浪人し上京しける、其の頃名古や山左衞門といへる武士の浪人もの、出雲國の巫女於國と夫婦に成り、京北野にて芝居興行仕りけるにより、彼の山左衞門と一つに成り、江戸さんや逝ひの風俗をして見せけるより起こりけるとなん（中略）それまでは今の六法の如く、擧（キス）を廻し振りし事はなく、左右ともに眞直に振たり」六法。

ろくばう うはきじたて 六方浮氣仕立 下文を見よ。新見翁昔物語「昔は花見遊山に出づるに（中略）若き衆家來不自由の時は、給持も侍も赴れなき故、六法浮氣仕立にて出づることとなり、其の出立ち伊達風流を盡くし、器量よき前髮の草履取を召連れ、四五人も申合はせ歌舞妓體にて出づる人も間間ありしが」

ろくばう-いっき 六方一揆 （名） 六方衆を以て組織せる一揆。建內記（文安四年九月七日）「六方一揆評定之旨、曾以不レ可レ有二改變一」

ろくばう-ことば 六方詞 （名） やっことば（奴詞）に同じ。

ろくばう-しゅう 六方衆 （名） 佛語。六方末寺の大衆。建內記「今度訴訟事、自二學侶一蒙二六方衆一於二十三重一大衆會合」

ろくばう-せき 六方石 （名） 【鑛】せきえい（石英）の異名。

ろくばう-まつじ 六方末寺 （名） 佛語。大和國添上郡奈良の興福寺の末寺にて戌亥の方、丑寅の方、辰巳の方、菩提院の方、龍花院の方、未申の方にあるもの。

即ち、安住寺・高雄寺・長岡寺・富貴寺・門王寺・慈光寺・寶生寺・極樂寺・龍福寺・圓樂寺などの總稱。大乘院寺社雜事記（文明元年七月八日）「六方末寺者、戌亥方分、安住寺・高雄寺・慈恩寺」

ろくばう-をとこだて 六方男達 （名） ろくばう（六方）三に同じ。

ろく-はく 六博 （名） 〔一より六までの數あるよりいふ〕 采目（サイメ）又采（サイ）の稱。

ろく-ぱく 六白 （名） 九星の一。金星に配し、本位は西北、即ち乾。方鑒秘傳集「六白は金星にして、西北を本宮とす」

ろくぱく-せい 六白星 （名） 前條に同じ。九星日要精義大成（二、日家九星の部）「霜降甲子を陰遁の下元として、乾の六白星、中宮に起るなり」

ろく-はふ 祿法 （名） 王朝以下に賜ふ祿の規定。又、祿を賜ふに就きての日録。續紀「勅、依二品位一治二定祿法一」 建武年中行事上、白馬「祿法を大辨にたぶ」

ろく-ぱふ 六法 （名） 憲法・刑法・民法・商法・刑事訴訟法・民事訴訟法の六種の法律の稱。「六法全書」

ろくはら-くわんりやう 六波羅管領 （名） ろくはらたんだい（六波羅探題）に同じ。元德二年三月日吉社幷叡山行幸記「干レ時六波羅管領は上野介宗宣朝臣成りけるに」

ろくはら-けんだん 六波羅檢斷 （名） 鎌倉幕府の職名。京都の六波羅南北の地に置き、非違を檢察し、不虞を戒め、罪人を決罰する等の事を掌るもの。檢斷職。東鑑（四十四、建長六年十一月十二日）「自二公家一被レ仰二下六波羅檢斷一事、有二其沙汰一、今日被レ定二御教書一」 元德二年三月日吉社幷叡山行幸記「六波羅檢斷南山刑部左衞門尉教利・富谷掃部左衞門尉秀高」

ろくはら-しこうにん 六波羅祗候人 （名） 鎌倉幕府の職名。京都の六波羅に祗候して雜事を辨ずる家人。東鑑（五十一、弘長三年十月十日）「被レ行二評定一、六波羅檢斷等事有二其沙汰一、令レ召二出彼祗候人佐治入道一」

ろくはら-しゅご 六波羅守護 （名） 次條に同じ。北條九代記（下、永仁元年）「久時（干時越後守北方）永仁元年三月、爲二六波羅守護一」

ろくはら-たんだい 六波羅探題 （名） 鎌倉幕府にて、京都六波羅に置きて、京畿及び關西の諸政を統べ、兵馬の事を總掌せしめし役。六波羅奉行。異本伯耆卷「六波羅の探題仲時・時益、頻りに關東へ此の事を告げ」

ろくはら-とうにん 六波羅頭人 （名） 次條に同じ。尊卑分脈（六）「知宗（六波羅頭人、伊賀守）」

ろくはら-ひきつけがしら 六波羅引付頭 （名） 鎌倉幕府にて、京都六波羅に置きたる職名。引付衆の頭人。諸奉行を指揮し、訴訟以下の公事を裁判するもの。六波羅頭人。頭人。六波羅越訴頭。尊卑分脈（十一）「基頼（六波羅引付頭、安房守、從五位上）」

ろくはら-ひやうぢやうしゅう 六波羅評定衆 （名） 鎌倉幕府の京都六波羅に設きたる職名。六波羅探題と共に萬事を裁決するもの。宿老の輩を以てこれに補す。尊卑分脈（十）「淸有（永仁、六波羅評定衆、刑部少輔）秀有（六波羅評定衆、宮內權大夫）」

ろくはら-ぶぎやう 六波羅奉行 （名） 一 ろくはらたんだい（六波羅探題）に同じ。御成敗式目追加「六波羅奉行、入道陸奧守平重時（于時相模守）・越後守平時盛（于時掃部助）」 二 鎌倉幕府の京都六波羅に置きたる職名。六波羅評定衆を輔佐して訴訟及び庶務を掌るもの。六波羅奉行人。太平記（一、頼員回忠）「六波羅奉行齋藤太郎左衞門尉利行」 杉原系圖「行政（佐渡守、六波羅奉行）」

ろくはら-ぶぎやうにん 六波羅奉行人 （名） 前條二に同じ。齋藤系圖「俊金（六波羅奉行人）」 近江國番場宿蓮華寺過去帳「六波羅奉行人、隱岐宮內丞次親（五十七歲）」

ろく-はらみつ 六波羅密 （名） 〔波羅密は梵 Pāramitā 究竟また到彼岸と譯す〕 佛語。成就すれば佛果を得る六種の行。即ち、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の稱。六度。榮雅玉篇「六波羅密の身心の相に所住せる所」 法華經（序品）「爲二諸菩薩一說二六波羅密一」

ろくはら-もんちゅうじょ-ぶぎやうにん 六波羅問注所奉行人 （名） 鎌倉幕府の京都六波羅に置きたる職名。總ての訴訟に預かり、六波羅問注所寄人を指揮するもの。東鑑（卅四、仁治二年十二月廿三日）「六波羅沙汰之時、問注奉行人、緩怠遲參之由依レ有二其聞一」

ろくはら-もんちゅうじょ-よりうど 六波羅問注所寄人 （名） 鎌倉幕府の職名。京都六波羅に置きたる職名。問注所に祗候して問注奉行人の指揮の下に訴訟の事務を取り扱ふもの。武家名目抄（職名廿六中）「六波羅問注所寄人」

ろくはら-をっそがしら 六波羅越訴頭 （名） ろくはらひきつけがしら（六波羅引付頭）に同じ。尊卑分脈（十）「光政（六波羅越訴頭、山城守）」

ろく-ばん 綠礬 （名） 【化】りよくばん（綠礬）に同じ。

ろく-ひ 鹿皮 （名） しかのかは。鹿の毛皮。國語（晉語）「鹿皮四个、諸侯之使、垂槖而入、稇載而歸」

ろ-ぐひ 艪杭 （名） 艪床の小さき杭。艪の入子に合はせて艪を受くるもの。ろべそ。鐵にて作れるを金艪杭（カナログヒ）といふ。

ろく-ふ 六府 （名） ろくゑふ（六衞府）に同じ。三代實錄（四十五、元慶八年四月廿一日）「天皇御二紫宸殿一、大臣已下侍、六府發レ番奏レ節」 名目抄（職名）「六府（左右近衞、左右兵衞、左右衞門）」

ろく-ぷ 六腑 六府 （名） 漢法醫の語。大腸・小腸・膽・胃・三焦・膀胱の六つの臓腑の稱。和名（一）「六府、大腸・小腸・膽・胃・三膲・膀胱也」 伊呂波字類「六府（俗作レ腑、大腸心府）」

ろく-ぶ 六部 （名） ろくじふろくぶ（六十六部）の略。俳諧新選（八）「六部おき猶おきぬ村薄」

ろくぶ-いた 六分板 （名） 厚さ六分ほどなる板。

ろくぶ-がさ 六部笠 （名） 六部などのかぶる藺製の笠。中央とまはりとを紺木綿にて包む。

ろく-ぶぎやう 六奉行 （名） 武家時代、武者奉行・旗奉行・長持奉行の稱。各二人より成る。

ろくぶん-ぎ 六分儀 （名） 【理】せきすたんとに同じ。

ろくぶん-ゑんき 六分圓器 （名） 前條に同じ。六分圓器量地手引草（六分圓器量地手引草目録）「六分圓器（セキスタント）ハ航海必用の器なり」

ろくへん-かう 六邊香 （名） 〔六邊は六辨、香は花の義。東鑑集解〕 ゆき（雪）の異稱。東鑑（十一、建久二年二月十七日）「取二六邊香一納二長櫃一」

ろくへん-けい 六邊形 （名） 【數】六つの直線によりて圍まれたる平面圖形の稱。

ろく-ぽふ 六法 （名） ろくばう（六方）四に同じ。

ろく-ぼん 六凡 （名） 佛語。十界の中にて、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の稱。歩船鈔（本）「十界といふは、一には地獄、二には餓鬼、三には畜生、四には修羅、五には人、六には天、七には聲聞、八には緣覺、九には菩薩、十には佛なり、このうち、はじめの六を六凡といひ、のちの四を四聖と號す」

ろくぽん-さんずん 六本三寸 （名） おほさんずん（大三寸）に同じ。

ろくぽん-だつ 六本立 （名） そでがき（袖垣）二に同じ。

ろく-まい 祿米 （名） 扶持米。韓非子「七十受二祿米一、鬻レ德施二惠于民一也」

ろく-まく 肋膜 （名） 【醫】きようまく（胸膜）に同じ。

ろくまく-えん 肋膜炎 （名） 【醫】肋膜に起こる病。感冒の症狀ありて、呼吸困難及び胸痛を感ず。

ろくまく-きんしょう 肋膜焮衝 （名） 【醫】前條に同じ。

ろく-み 六味 （名） 六種の味ひ。即ち、苦・酸・甘・辛・鹹・淡の稱。和爾雅（六）「六味（佛家、以二甘・辛・鹹・苦・酸・淡一爲二六味一）」

ろく-みやく 六脈 （名） 漢方醫にて脈搏の六種。即ち、浮・沈・虛・實・遲・數の稱。源氏冷泉節（上）「六脈靜かに考ふれば、浮大にして活活と溢れたり」 史記（扁鵲傳注）「正義曰、黃帝素問曰、待レ切レ脈而知レ病、寸口六脈、三陰三陽」

ろく-めい 祿命 （名） 陰陽道の方にて忌むべき日。禁秘抄（下）「八卦幷祿命御物忌」

ろくめい-さう 鹿鳴草 （名） 【植】はぎ（胡枝子）の異名。

ろくめん-たい 六面體 （名） 【數】六つの平面によりて圍まれたる立體の稱。

ろく-もつ 祿物 （名） 祿に賜ふ布帛。祿。齋院司式「祿物韓櫃六合」

ろく-もつ 六物 （名） 佛語。三衣及び鐵鉢・坐具・漉水囊の稱。

ろくもん-せん 六文錢 （名） 紋所の名。ぜに（錢）三を見よ。

ろく-やた 六彌太 （名） 〔豆腐をおかべといふより、岡部六彌太にかけていふ〕 豆腐の隱語。

ろく-やね 陸屋根 （名） 勾配ゆるくして、其の上を安全に歩行し得らるる屋根。

ろく-ゆ 六喩 （名） 佛語。諸行無常の譬へに引ける六種のもの。即ち、夢・幻・影・泡・電・露の稱。太平記（廿七、妙吉侍者事）「六喩般若の眞文を寫し、彼の追善にぞ被レ擬ける」

ろく-よく 六欲 （名） 佛語。色・形貌・威儀態度・語言音聲・細滑（皮膚の柔軟滑澤なること）・人相（愛すべき人相）の六つによりて愛著を起こす慾。十訓（上）「實相無漏の大海に、五塵六欲の風は吹かねども、隨緣眞如の波の立たぬ時なし」

ろくよく-てん 六欲天 （名） 佛語。三界諸天のうち、欲界に屬する六つの天。即ち、四王天・忉利天・夜摩天・兜率天・樂變化天・他化自在天の稱。日本武尊吾妻鑑（四）「非想非非想・他化自在、六欲天も高からず」

ろく-りつ 六律 （名） りくりつ（六律）に同じ。

ろく-れき 六曆 （名） 古昔、使用せられたる六つの曆。即ち、元嘉曆（ゲンカレキ）・儀鳳曆（ギホウレキ）・大衍曆（タイエンレキ）・五紀曆（ゴキレキ）・宣明曆（センミヤウレキ）・貞享曆（ヂヤウキヤウレキ）の稱。各條を見よ。

ろく-れんぱつ 六連發 （名） 六箇の彈丸を連發し得る裝置の銃。

ろく-ろ 轆轤 （名） 一 物を引き又は吊すに用ふる滑車の稱。圓融院御受戒記（寛和二年三月廿一日）「大炊尾米十五石、一甑炊レ之、數十人用二轆轤一下レ甑」 書斷「盛二誕轆轤一、引上書レ之」 二 車井戸にて釣瓶を上下せしむる繩を掛くる滑車。三 ろくろがな（轆轤鉋）の略。和名（十五）「轆轤（六路）圓轉木機也」 宇津保（吹上上）「ろくろにひきて、さまざまに色どりて」 四 ろくろだい（轆轤臺）の略。五 傘の柄の上端に取り付くる小さき臼狀のもの。六 しやち。まんりき。七 そろばん（算盤）をいふ、薩摩國の方言。物類稱呼

ろくろ-かぢ 鹿盧舵 （名） 船具。かぢ（舵）を見よ。

ろくろ-がな 轆轤鉋 （名） 木地細工・錫製の器などの圓き挽物を造るに用ふる具。軸の端に刃器を設け、軸に革紐を絡ひ、足にて踏み軸を旋廻せしめつつ、作らんとする器の材を刃に當てて彫り又は削る裝置のもの。ろくろがんな。ろくろ。まはしぎり。木工寮式「鐵百廿四廷二斤（轆轤鉇刃一料、幷充轆轤鉇刃物一料）」 和名（十五）「鋋（路久呂加奈）轆轤裁刀也」

ろくろ-がんな 轆轤鉋 （名） 前條に同じ。

ろくろ-ぎ 轆轤木 （名） 【植】えごのき（齊墩果）の異名。

ろくろ-ぎり 轆轤錐 （名） まひぎり（舞錐）に同じ。

ろく-ろく 轆轆 （副） 車の走る響きにいふ語。轣轆。轆轆。又、馬の嘶く聲にもいふ。大磯虎稚物語（御狩馬揃）「嘶ふる聲は轆轆として」 元好問詩「白沙漫漫車轆轆」

ろく-ろく 碌碌 （副） 役に立たざるさま。又、何事もなし得ざるさまにいふ語。史記（酷吏）「九卿碌碌、奉二其官一」 同（平原君）「公等錄錄、所謂因レ人作レ事者也」 錄錄。

ろく-ろく 陸陸 （副） 眞面目に。十分に。よく。ろくに。

ろくろく-ぎよ 六六魚 （名） 〔一條の鱗、三十六あるよりいふ〕 【動】こひ（鯉）の異名。

ろくろ-くび 轆轤頸 （名） 頸甚だ長く、伸縮自在なりといふ妖怪。ぬけくび。三代男（五）「白晝のろくろ首、芝居にて見すれば」 書言字考節用（五）「飛頭蠻（ロクロクビ）・飛頭獠（同）・轆轤頭（同）」

ろくろく-りん 六六鱗 （名） 【動】ろくろくぎよ（六六魚）に同じ。曾我會稽山（一）「龍の氣ざしの六六鱗」 陸游詩「望斷秋江六六鱗」

ろくろ-こう 轆轤工 （名） ろくろし（轆轤師）に同じ。式部省式（上）「凡木工省長上工（中略）轆轤工一人」

ろくろ-ざ 轆轤座 （名） 船の名所にて、軸・艫の轆轤のある所。

ろくろ-ざいく 轆轤細工 （名） 轆轤にて器具を細工すること。又、其の細工物。ろくろびき。

ろくろ-し 轆轤師 （名） 轆轤にて挽物を作る工人。ひきものし。宇津保（吹上下）「ろくろしどもゐて、ごきども同じものしてひく」

ろくろ-だい 轆轤臺 （名） 圓形の陶器を造る具。圓き木盤の下に軸ありて旋る裝置をなし、盤上に陶土を載せ、足にて軸を踏みて盤を旋轉せしめ、其れにつれ、

手にて陶土を種種の形に作る。

ろくろ-なは 轆轤繩 (名) 車井戸のろくろにかくる繩。井戸繩。しかた咄「つるべつつ井筒にかけしろくろなは、負けにけらしな身をも見ざるまに」

ろくろ-はかま 轆轤袴 (名) 布をかちんに染め、下括りとて踝の上にて括るやうにしたる袴。比叡山の衆徒などの雪の時著するもの。醍醐断餘「寺家年頭に武家御所へ參る時は中﨟小者伴に中方袴衣ろくろ袴の衆多し」

ろくろ-ばん 轆轤盤 (名) ろくろだい(轆轤臺)に同じ。

ろくろ-びき 轆轤挽 (名) ろくろざいく(轆轤細工)に同じ。宇津保（吹上上）「紫檀のついがさね、同じろくろびきのごとき」

ろくろ-ぶね 轆轤船 (名) 船用の轆轤及び綱具等を積む船。農具便利論（下）「挺立轆轤船、長さ五尋、ろくろ盤、長さ五尺二寸、横七尺七寸、人足四人掛」

ろくろ-わん 轆轤椀 (名) ろくろびきの椀。神宮寺資財帳「染塗轆轤椀二合」

ろ-くわ 露華 (名) つゆのひかり。つゆ。江淹詩（擬謝臨川）「風光多樹色、露華翻蕙陰」

ろ-くわ 蘆花 (名) あしのはな。朗詠「白疑荷葉凝霜早、人道蘆花過雨餘」江總詩「蘆花霜外白、楓葉水前丹」

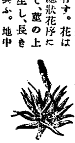
ろ-くわ 爐火 (名) ゐろりの火。太平記（十三、神泉苑）「爐火忽に消えて、空しく冷灰に成りにければ」水經注「夏大暑、使曝坐、環以十爐火、不言熱」

ろ-くわ 濾過 水をこしとほすこと。

ろ-ぐわ 露臥 野宿すること。屋外に臥すること。後漢書「露臥不飲、無一人蹶跌、無一人疾病」

ろ-くわい 爐灰 (名) 爐のはひ。僧叚雲詩「宿火陷爐灰」

ろ-くわい 蘆薈 (名) 【植】百合科、蘆薈屬の常綠植物。葉は肉質、大形にて尖り、稜邊に鋭き鋸齒を有す。花は穗狀の總狀花序たる排列して、莖の上部に著生し、長き花莖を具ふ。地中海沿岸及び熱帶地方に栽培せらる。葉より採りたる汁液を蘆薈と稱し、瀉下藥及び健胃藥として用ふ。あだん。



（ろくわい）

ろくわう-ばん 濾光板 (名) 【理】寫眞術に於て、特種の色の光に就きて陰畫を造らんとする時、其の色の光のみを通過せしめ、他の光を遮止せしむるための板。ぜらちん液に適當の顏料を加へて著色し、之を硝子板に塗りたるもの。

ろくわ-かう 六和香 (名) 沈香・丁子・貝香・薫陸・白檀・麝香の六種を和合したる香。運步色葉「六和香、沈香・丁香・薫陸・貝香・白檀・麝香也、已上六種也」

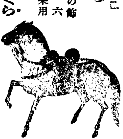
ろ-くわく 鹵獲 敵のものを分捕すること。又、いけどり。唐書「鹵山鹵獲不貲」

ろくわ-ち 濾過池 (名) 水道の水を濾過する爲め、特別の裝置を施したる貯水池。

ろくわ-はふ 濾過法 (名) 【化】不溶解性の物質を液體より分別する方法。通常濾紙を漏斗の內面に密著せしめ、其の中に不溶解性の物質を混有せる液を注加して、液體のみを通過せしむ。

ろく-ゐ 祿位 (名) 俸祿と位階と。周禮（天官、冢宰）「祿位以馭其士」

ろくゐ-ぐら 六位鞍 (名) 馬の飾鞍の一種。六位の人の乘用するもの。



（ろくゐぐら）

ろくゐ-の-くらうど 六位藏人 (名) 六位にして藏人所の職員たるもの。諸大夫の中より選任す。宮中の雜事を勤め、朝夕の御膳の給仕などを勤む。四人あり、日を分かちて奉行す。就職の順序によりて席次を定め、第一を極﨟（ゴクラフ）、第二を差次（サシツギ）、第三を氏藏人、第四を新藏人といふ。日下﨟（ヒゲラフ）。枕（三）「六位の藏人うへの判官とうちいひて、世になくきらきらしき物におぼし」

ろく-ゐん 勒韻 (名) 韻を分かちて詩を作るとき、例へば一東にて中・翁・風・空といふ如く、一韻の中にて數箇の字を取り、其の字を次第して順を定め、其の順のままにて一篇の詩を作ること。作文大體（勒韻）「無題詩多有勒韻、而句題勒韻之例、春淺帶輕寒題、勒初・餘・魚・虛」

ろく-ゑ 六衞 (名) ろくゑふ(六衞府)の略。續紀（十、天平元年二月辛未）「將六衞兵、圍長屋王宅」河海抄（三）「六衞（左右近衞、左右衞門府、左右兵衞府）」

ろくゑ-の-つかさ 六衞司 (名) 次條に同じ。竹取「六衞のつかさ合はせて二千人の人」

ろく-ゑふ 六衞府 (名) 初めは衞門・左右衞士・左右兵衞・中衞の六府なりしが、弘仁二年以後、左右近衞・左右衞門・左右兵衞の六府の總稱。六府。六衞。續後紀（廿、嘉祥三年三月壬午）「分遣六衞府佐已下、捕京中群盜」三代實錄（一、天安二年十月朔日）「六衞府見直於陣、賜絹綿各有差」

ろくをん-さう 合掌消 (名) 【植】蘿藦（ガガイモ）科、いけま屬の多年生草本。高さ四五尺に及ぶものあり。葉は莖と共に白綠色を呈し、長倒卵形、無柄にて對生す。花は葉腋より出づる花梗に生じ、綠白色五裂の合瓣花冠を有す。ひこびやくぜん。

ろくをん-さう 鹿苑草 (名) 【植】ふなばらさう(白薇)の異名。

ろ-けい 路徑 路逕 (名) みちと小みちと。みち。徑路。太平記（七、吉野城軍）「血は草芥を染め、尸は路徑に橫たはれり」

ろけっ-から (名) 【植】なつずゐせん(月下香)の異名。

ろ-けん 露顯 露見 ❶祕したる事のあらはるること。秘密の暴露すること。保元（新院御謀叛思召立事）「謀叛の事、既に露顯に依つてなり」漢書（王莽傳）「不敢露見」❷婚禮の三日目に他人に披露すること。ところあらはし。江次第（廿、執聟事）「近代露顯夜也」古今著聞抄（十一、元久二年四月）「女御入內、十三日女御有露顯事」

ろ-こ 蘆胡 ころ(胡蘆)に同じ。後漢書（西羌傳）「掩口盧胡而笑」

ろ-ご 露語 (名) ろしあ語。

ろ-こく 漏尅 (名) ろうこく(漏尅)に同じ。伊呂波字類抄「漏尅（ロコク）」

ろ-ごす (希 Λόγος) (名) ❶【哲】世界原理として、ぬーす又は理性と同義に用ひらる。❷【宗】神と萬物との媒介者たる力の統一者、又は神の顯現たる永恆の神子。

ろ-こつ 顱骨 (名) 頭のほね。頭蓋骨。木華文（海賦）「顱骨成嶽、流膏爲淵」

ろ-こつ 露骨 少しもかざらざること。むきだし。ありのまま。左傳注疏「贏露是露骨之名、其義與裸相近」

ろ-こん 露根 (名) 地上にあらはれ出でたる樹木の根。ねあがり。張籍詩「古樹露根堪繫馬」

ろ-ざ 露坐 屋根なき所に坐すること。後漢書（明帝紀）「天子親自露坐德陽殿東廂請雨」

ろ-さい 邏齋 羅齋 ❶【佛語】禪僧の托鉢して齋食を乞ふこと。庭訓往來（十月）「禪家方者、相伴遇齋之僧」大藏狂言（朝比奈）「ろさいにいざや出でうよ」范成大詩「幸有一千門香積供、不妨隨意去邏齋」❷乞食の異名。

ろさい-ちち 囉齋乳 (名) もらひ乳をいふ。西國の方言。夏山雜談「西國にて中﨟小兒の母に乳汁なくて、もらひ乳にて育つるをろさい乳と云ふ」

ろ-さう 弄槍 (名) ろうさう(弄槍)に同じ。龍鳴抄（上）「弄槍（ロウサウ）、拍子十二、これ大法花供養樂にする物也」

ろ-さう 魯桑 (名) 【植】桑科、桑屬の落葉喬木。桑の一品種。葉大にして厚し。もと支那より舶來せるもの。

ろ-さう 露草 (名) 【植】かんざう(甘草)に同じ。

ろざにりん (英 Rosaniline) (名) 【化】$C_{20}H_{21}N_3O$ あにりん・を原料として得らるる色素の一種。ふくしん又はませんた・とも稱し、黃綠青色の結晶をなし、水に溶けて深紅色を呈し、絹・羊毛の類を染むるに用ふ。化學上にては、ろざにりん・の鹽基類と稱すべきもの。

ろざん-ずみ 廬山炭 (名) 支那の廬山より製出する炭。唐船噺今國姓爺（中）「八俵を一からげ、重ねて背負ふろざん炭」

ろ-し 濾紙 (名) 液體內に混ぜる固形物と液とを分かつために用ふる紙。

ろ-し 露積 ろせき(露積)に同じ。漢書（孝文紀）「充溢露積於外、紅腐不可勝食」

ろ-じ 路次 (名) ❶みちすぢ。みちすがら。保元（上、左大臣上洛）「路次嗷嗷闘戰」太平記（二、南都北嶺行幸）「供奉の行粧、路次の行列を定めらる」晉書（呂光載記）「所遇路次、皆堅壁淸野」❷ろぢ(露地)に同じ。

ろ-じ 鸕鷀 (名) 【動】う(鵜)に同じ。隋書（倭國傳）「以小環掛鸕鷀項、令入水捕魚、日得百餘頭、以充食」高適詩「潭邊竹裏隱鸕鷀」

ろ-しう 蘆洲 (名) あしの生えたる洲。原化記「至江入蘆洲中」

ろじうむ (英 Rhodium) (名) 【化】銀の如き光澤と延性とある金屬。極めて安定にして、純粹なるものは王水も之を溶かすこと能はず。融點一九七〇度、比重一二・一、原子量一〇三。物理・化學用の諸器具の製作に用ひらる。

ろじっく (英 Logic) (名) 論理學。論法。

ろじ-つくりやく 露次作役 (名) ろぢつくりやく(露地作役)に同じ。吏徵附錄（世職）「山本道句（御露次作役）」

ろじ-の-もの 露次者 (名) 江戸幕府の數寄屋頭の屬僚。露地の掃除及び勝手の用事等を勤むるもの。十俵一人扶持高、二半場、白衣役とす。吏徵（下）「御露次之者百七人、十俵一人扶持高」

ろじ-ぶぎやう 路次奉行 (名) 鎌倉幕府の制、將軍の遠路に赴かるる時、旅中の事を沙汰する諸奉行の總稱。東鑑（五十、弘長三年八月九日）「御上洛中路次奉行人已下事被定之」

ろ-しや 廬舍 (名) こや。人家。太平記（廿八、慧源禪閤）「船を沈め、釜甑を破って、廬舍を燒く」史記（項羽本紀）「沈船、破釜甑、燒廬舍」逸文釋義「在野曰廬、市居曰舍」

ろ-しや 硇砂 (名) 【化】えんくわあんもにうむ(鹽化安母紐謨)の異名。

ろしや-がは 露西亞革 (名) 露西亞國より產する、光澤ありて滑かに品質の優良なる革。

ろ-じやう 路上 (名) みちなか。みちのほとり。途上。

ろ-しゆう 呂衆 (名) 風呂屋もの。伽羅女「大阪中の茶屋白人・呂衆」

ろ-しゆく 露宿 屋外に宿ること。野宿。露臥。後漢書（王喬傳）「境內淸夷、商人露宿於道」

ろ-しゆつ 露出 あらはれいづること。あらはしいだすこと。むきだし。

ろ-じゆん 蘆筍 蘆笋 (名) あしのめ。朗詠「穿沙蘆笋葉纔分」

ろ-じん 路人 (名) 道路を往來する人。行人。盛衰記（四十三、源平侍遠矢）「軍敗れ運盡きぬれば、名將勇士も或は路人の爲に被獲」許渾詩「路人唯拜漢文陵」

ろじん-つう 漏盡通 (名) 佛語。よく有漏の煩惱を滅盡して、三界生死の苦を離るること。

ろ-すけ 露助 (名) ろしや人を罵りいふ語。

ろ-すゐ 蘆錐 (名) 〔錐の如く尖れるよりいふ〕あしの若め。あしかび。元稹詩「氷消田地蘆錐短」

ろすゐ-ら 濾水羅 (名) すゐなう(水囊)に同じ。

ろ-せい 艫聲 (名) 艫をおす音。徐鉉詩「卅過江中聞艫聲」

ろせい-の-ゆめ 盧生夢 (句) かんたんのゆめ(邯鄲夢)に同じ。

ろ-せき 露積 雨露を凌ぐべき屋根なき所に物品を積みおくこと。野天に積みおくこと。舊刑法（第四百、六條）「露積したる柴草竹木其他の物件」

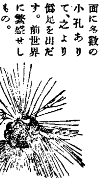
ろ-せき 鹵瘠 地味のあしきこと。やせ地。

ろ-せん 路錢 (名) 旅費。路用。狂言記（武悪）「思ひもよらぬ、ろせん迄を貰うた」

ろ-ぞく 蘆粟 (名) 【植】さたうもろこし(蔗粟)に同じ。

ろ-だい 露臺 (名) ❶屋根なき臺（ウテナ）。げつだい。史記（孝文本紀）「欲作露臺、召匠計之」❷禁中の仁壽殿にある床張の場。亂舞などのある所。枕（七）「ろだいの前に植ゑられたりけるぼうたん」古事談（二）「夏公事日、公卿等徘徊露臺、披南殿北戶帶涼風」

ろたりあ (名) 【動】原生動物中、根足類の一種。有孔蟲に屬す。體の外部に石灰質の精功なる螺狀の介殼を有し、其の表面に多數の小孔ありて、之より僞足を出だす。前世界に繁殖せしもの。



（ろたりあ）

ろ-たん 露探 (名) 日露戰役の時、我が國情を探訪して、陰に露國に通告せしもの。

ろ-だん 爐壇 (名) ごまだん(護摩壇)に同じ。盛衰記（十八、龍神守三種心）「遠近舟の旅人は、爐壇の烟に心すみ」太平記（十二、神泉苑）「東寺に爐壇を構へ、大威德明王の法を修し給ふ」

ろ-ぢ 露地 (名) ❶地面。地上。謠曲（車僧）「露地の白牛を打って見せんと、拂子を上げて虛空を打てば」❷門內、又は庭上の通路。❸建物の間の狹き通路。❹茶の湯にて、腰掛・雪隱等の如き茶室附屬物の設置しある區域。此れに待合ひ・堂腰掛・中腰掛あるものを三重露地といひて正式のものとすれども、多くは中潜りを以て內露地と外露地とに分かち、これを二重露地といふ。書言字考節用「露地（ロヂ又作路地）」南方錄（一、本文）「露地は草庵寂寞の境をすべたる名なり」中略「是れ利休居士世間の塵勞垢染を離れ、淸淨の心地と表したる本意なり、かの書院盆子結構の式よりかねをやつし、露地の一境を開き、一宇の草庵に點茶して世間の塵境を出し導かんと也、路地淸淨の外相は樹石天然の一境也、休の詠に、露地は唯浮世の外の道なるに、心の塵をなぞ散らすらん」

ろぢ-あんどう 露地行燈 (名) 夜咄し及び曉茶會などの際、待合ひにある上客の座席の側に據く行燈。茶道筌蹄（七、燈燈）「露地行燈、利休形、檜木地春慶塗、覆ひ眞黑ぬり、火皿にほうつき有りて、一枚の油蓋を置く、風なき夜は覆ひをとるなり」

ろぢ-ぐち 露路口 (名) ろぢの出入口。一代女（四）「露地口の柱に、此の奧に萬物縫ひ仕立屋と張札をして」

ろぢ-げた 露地下駄 (名) 茶の湯にて、露地の出入にはく下駄。杉製にて、鼻緒は吳竹の皮とす。茶道早合點（上）「露地下駄、雨ふりにはく」

ろぢ-つくりやく 露地作役 (名) 江戸幕府の數寄屋頭の屬僚。露地の手入れに從事するもの。文久二年武鑑「御露地作役、山本道井」

ろぢ-ど 露地戶 (名) ろぢ口に取り附くる戶。

ろぢ-には 露地庭 (名) 茶の湯の語。露地門より腰掛までの露地。

ろぢ-の-もの 露地者 (名) ろじのもの(露次者)に同じ。武家嚴制錄（四十、家綱公御本丸御條令）「御路地之者之頭・每日壹人づつ罷出で、路地掃除可仕之」

ろぢ-もん 露地門 (名) 露地口にあるもん。

ろ-ちやう 顱頂 (名) あたまのてっぺん。蘇軾詩「擁腫異顱頂」

ろちやう-かん 驢腸羹 (名) 羊羹の類なるべし。庭訓往來（十月）「羊羹・豬羹・驢腸羹」

ろちやう-こつ 顱頂骨 (名) 【醫】頭蓋骨の一。左右一對ありて、扁平・方形。頭蓋の中心に位し、殆ど平等に穹窿面をなすもの。

ろ-ちゆう 路中 (名) みちなか。旅行の途中。謠曲（鵜飼）「路中に道多うして、道極まりなし」

ろ-ちりめん 絽縮緬 （名）緯目に絽の如き隙のある縮緬。

ろ-ぢん （名）ろべそ(艪臍)に同じ。

ろ-づ ⸢蘆頭 （名）〔あしの根の如きよりいふ〕藥用人參の一種。

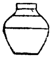
ろっぐうーど-の-き （英 Logwood）（名）〔植〕荳科、ろっぐうーどのき屬の常綠喬木。高さ五十尺内外に達す。葉は倒心臟形の小葉より成る羽狀複葉。花は黃色を呈し、長き花軸に生ず。中央亞米利加の原產。此の植物の心材の暗赤色を呈するものは、ろっぐうーど・と稱し染料として賞用す。其の色素はへまときしりん・と稱する赤色の結晶體にて、顯微鏡實驗用の染料として賞用す。又此の心材を收斂藥及び强壯藥に用ふ。

ろっせる-えん （英 Rochelle salt）〔——鹽〕（名）【化】$C_4H_4O_6KNa\cdot4H_2O$ 酒石酸のかりうむ及びなとりうむ鹽。無色の晶をなし、ふぇーりんぐそりうしょん・の製成に用ひらる。

ろ-づな 櫓綱 （名）ろなは(櫓繩)に同じ。

ろ-てい ⸢路程 （名）みちのり。行程。旅程。

ろ-てい ⸢爐蹄 （名）茶入の一種。



（いてろ）

ろ-てき ⸢蘆荻 （名）あしとをぎと。古樂府「巴陵三江口、蘆荻齊如レ麻」

ろ-てん ⸢露天 （名）のでん(野天)に同じ。

ろ-てん ⸢路店 （名）路傍に物品を陳列して商賣をするみせ。ほしみせ。てんとぼし。大道店。古物商取締法第五條一號「古物の市場行商露店及競賣」

ろ-てん ⸢露點 （名）【理】大氣の温度下りて或る温度に至る時は、大氣中の水蒸氣の張力が其の温度に對する蒸氣の最大張力となり、大氣が水蒸氣を以て飽和せらるるに至る。此の時の温度の稱。

ろ-ど ⸢壚土 （名）ふしよくど(腐植土)に同じ。

ろ-とう ⸢路頭 （名）みちのほとり。みちばた。路傍。盛衰記廿七、天下穢死「路頭に死人の多き事、算を亂せるが如し」

ろとう に まよふ 迷路頭 生活を立て得ずして流浪す。

ろ-とう ⸢爐頭 （名）ゐろりのほとり。ろばた。爐邊。

ろ-どこ 艪床 （名）船中の關所。上棚に顯はるる船梁。艪をかくる所なる故に名づく。其の中央に艪をかけたるを缺艪床(カキトコ)と云ふ。胴・腰當・艪上(アゲ)・まきかい・遊艪(アソビ)等の名所あり。掛艪床(カケロトコ)。太平記十八、一宮御息所「御顏に水を灑ぎ、艪床を洗らて、御口に入れなんどしければ、半時計りして活き出でさせ給へり」

ろ-どん ⸢魯鈍 おろかにして智のにぶきこと。愚鈍。晉書鄭默傳「何緻魯鈍之甚也」

ろ-なう 論無 （副）〔論(ロ)なくの約〕いふまでもなく。勿論。宇津保物語上「文給へ見給へん、ろなう私事侍りけんかし」源氏「ろなう彼の後の世の妨げにもやと思ひ給ふるを」

ろ-なは 艪繩 （名）舟の床より艪の上端に繫くる繩。はやを。

ろ-のは 艪葉 （名）船具。艪の小名。ろあし(艪脚)に同じ。

ろ-のま 爐間 （名）茶座敷の爐の設けある室。

ろ-は （名）〔只の字を分かてば、ロとハとになるよりいふ〕代金を要せざること。ただなること。

ろ-ば ⸢驢馬 （名）【動】うさぎうま(驢)の異名。齊民要術「凡驢馬駒初生忌二灰氣一」

ろ-はい ⸢驢背 （名）驢馬の背上。驢馬に乘ること。北夢瑣言「鄭綮云、詩思在二灞橋風雪中、驢子背上一」

ろ-ばう ⸢路傍 （名）みちのほとり。みちばた。劉楨詩「發レ車非二素帶一、從者盈二路傍一」

ろばう の ひと 路傍人 自己と何等の關係なき人。

ろばう の やなぎ 路傍柳 〔誰れにても手折り得る義〕遊女などに譬へいふ語。

ろ-ばた 爐邊 （名）ろへん(爐邊)に同じ。

ろは-だい （名）〔ろはを見よ〕公園などに設けて、公衆の隨意休憩に供する共同の椅子。無料なるよりいふ。

ろ-ばん ⸢露盤 鑪盤 （名）塔の頂に建つる相輪。九輪。古京遺文元興寺露盤銘「和銅八年四月敬以進二上於三重寶塔七科鑪盤一」和名抄「鑪盤、曹植文集云「固如二露盤一長存永貴」」

ろばん-はかせ 鑪盤博士 （名）鑪盤の製造に巧みなる人。崇峻紀「百濟國遣レ使中略獻二佛舍利中略鑪盤博士將德白昧淳二」

ろ-ひ ⸢路費 （名）ろよう(路用)に同じ。王禹偁詩「道糧無二斗粟一、路費無二百錢一」

ろひ-ざくら 路飛櫻 （名）【植】さぎごけ(通泉草)の異名。

ろ-びやうし 櫓拍子 （名）櫓をあやつる拍子。天神記三「寄せ來る波に櫓取り直し、櫓拍子踏んで」

ろ-びらき 爐開 （名）茶家にて、陰曆十月朔日に地爐を開き用ふること。其の日、客を招きて茶會を催す。又、新茶の壺の口を始めて切り開きて用ふるより口切ともいふ。類柑子「爐開きや汝をよぶは金の事」芭蕉句集「爐びらきや左官老い行く鬢の霜」

ろびらき-くわい 爐開會 （名）爐開きの日に催す茶會。改正月令博物筌十月「朔日、爐開(中略)今日爐を開き」華實年浪草十「爐開」

ろ-ふさぎ 爐塞 （名）茶家にて、陰曆三月晦日に地爐を塞ぎて風爐を開き用ふること。太祇全集「爐塞や老いのきげんの僞ごと」改正月令博物筌三月「晦日、爐閉(ロフサギ)又爐塞ともかけり、茶人の爐をふさぐ也、およそ茶湯の法、十月亥の日より三月晦日限りにして、四月朔日より風爐なり」

ろ-ぶち 爐緣 （名）㊀爐の緣(ヘリ)にとりつくる框。㊁爐のほとり。

ろ-ぶつ ⸢露佛 （名）ぬれぼとけ(濡佛)に同じ。

ろ-へい ⸢蘆蔽 （名）細き竹などを編みて裏に生絹を附けたるもの。掃部寮式「逢春門内南北鋪二蘆蔽一置二草墪一爲二開司座一」西宮記臨時八、宮外記政「倚子下敷二蘆蔽一」

ろ-へう ⸢路標 （名）みちしるべ。

ろ-べそ 艪臍 （名）ろぐひ(艪杭)に同じ。

ろ-べつ-せん 艪別錢 （名）南北朝の頃、艪の數に應じて船舶に課したる稅。那智山實方院文書「西國□送船幷廻船等、几艪別錢□壹百文、爲二兵粮料足一」

ろべりあ-さう 魯別里亞草 （英 Lobelia）（名）【植】桔梗科、山梗菜屬の宿根草。高さ二尺内外に達す。葉は長卵形、緣邊に不整齊の鋸齒を有し、下部にある葉は葉柄を有し、上部にあるものは無柄なり。花は紫色、不整齊の花冠を有し、膨脹狀の果實を結ぶ。北亞米利加の原產。花季に於て乾燥したるものは喘息・百日咳等を治するに用ふ。

ろ-へん ⸢爐邊 （名）ゐろりのほとり。ろぶち。朗詠「坐在二爐邊一手不レ龜」

ろ-へん ⸢路邊 （名）ろばう(路傍)に同じ。盛衰記十一、有王・俊寛問答「莊嚴端直柔和の姿も、亦路邊の骸骨なり」

ろ-ぼ ⸢鹵簿 （名）〔ろ(鹵)は盾(タテ)〕儀仗を具へたる行幸の行列。みゆきのおともぞろひ。宮衞令「凡鹵簿内不レ得二横入一、其隊仗之官檢校者、得二去來一」漢官儀「兵衞以二甲盾一居レ外、爲二前導一、皆著二之簿一、故曰二鹵簿一」

ろ-ほう ⸢露鋒 （名）書法にて畫(クワク)の起頭を、著筆のさきの見ゆるやうに書くこと。(藏鋒の對)

ろ-ま （數）寧にて、六の稱。

ろ-まう ⸢鹵莽 ㊀土地の荒れはつること。又、其の土地。㊁粗略にして、心を用ひざること。やりばなし。莊子則陽「君爲レ政焉勿二鹵莽一、治レ民焉勿二滅裂一」㊂文辭の蕪雜なること。

ろ-まら （名）ろべそ(艪臍)に同じ。其角句「あれあれとろまらはづれて郭公」

ろ-みさを 艪水棹 （名）船具。水棹(ミサヲ)に代用せる艪。淺瀨の港を出入する時、艪を水棹に代用することあり。

ろ-めい ⸢露命 （名）露の如くはかないのち。つゆのいのち。平治物語信西被誅「寸の首、劍の先に懸かって、露命を草上に曝らすといふ相」

ろめい を つなぐ 繫露命 からうじて生活し行く。

ろやう-の-ほこ 魯陽戈 （句）〔下文の淮南子に出づ〕日を招き返すほどの勢力あること。淮南子覽冥「魯陽公與レ韓搆レ難、戰酣日暮、援レ戈而撝レ之、日爲レ之反三三舍一」

ろ-よう ⸢路用 （名）旅行の費用。旅費。路費。

ろ-らう ⸢路粮 （名）しりやう(資粮)に同じ。

ろり （名）產婦分娩して產屋に居る間。伊勢太神宮參詣精進條條「ろりの中の赤子の死は忌み無レ之」

ろ-り ⸢露里 （名）ろしあ國の里程。その一里は我が九町四十六間四尺餘に當たる。

ろ-りやく ⸢鹵掠 かすめとること。漢書高帝紀「所レ過毋レ得二鹵掠一」

ろ-れつ （名）〔呂律の訛りか。和訓栞〕物言ふ調子。

ろれつ が まはら ぬ 言語、分明ならず。ものいひとのはず。泥醉者などの不明亮なる言語にいふ。

ろ-れつ ⸢臚列 つらねならぶること。張衡文選東京賦「九賓重臚人列」

ろ-れん ⸢蘆簾 （名）蘆にて編めるすだれ。白居易詩「蘆簾前後捲、竹簟當中施」

ろ-ゐ ⸢賂遺 （名）おくられたる賄賂。舊刑法第百三十二條「敵國に通牒し又其賂遺を收受して」

ろ-ゐ ⸢蘆葦 （名）あし。よし。吳志徐盛傳「宜レ代二蘆葦一以爲レ冾、佐レ船渡レ軍」

ろん ⸢論 （名）㊀事の理を述べとくこと。のべ語ること。㊁いひ爭ふこと。あげつらふこと。諸神記「互ひの論は槻弓の力及ばぬ事なれば」㊂意見。見解。㊃佛語。佛の所說を經といふに對して、菩薩などの所說の稱。

(諺)論より證據 論ずるより證據によりて裁決せよ。俠客傳三「鄙語にいふ論より證據、今更多辯に及ぶべからず」

ろん-い ⸢論意 （名）議論の趣旨。論旨。

ろん-かく ⸢論客 （名）議論を好む人。議論家。議論ずき。

ろん-ぎ ⸢論議 ㊀論じはかること。義理を論說すること。議論。三代實錄五、貞觀三年八月十六日「明經博士等奉レ參二内殿一、論義如レ常」史記平原君傳「與二十九人一論議」㊁佛語。法會などに、僧の問答して法義を論じあふこと。孝德紀「請二沙門惠隱於内裏一使レ講二無量壽經一、以二沙門惠資一爲二論議者一、以二沙門一千爲二作聽衆一」後紀廿二、弘仁四年正月戊戌「最勝王經講畢、迎二尚學僧十一人於殿上一論義」論義。㊂琵琶湖邊にて、風の定まらざること。物類稱呼

ろん-きう ⸢論究 論じて、物の理を究むること。おしきはむること。北齊書文宣紀「詔施用猶未レ盡レ善、可レ令二群官更加論究一」

ろん-きつ ⸢論詰 論じ詰(ツ)むること。

ろん-きふ ⸢論及 論じて、他の事にまで及ぶこと。

ろん-きゅう ⸢論窮 ろんきう(論究)に同じ。

ろん-きょ ⸢論據 （名）議論のよりどころ。議論の根據。

ろんぐ-とん （英 Long ton）〔——噸〕（名）ちやうとん(長噸)に同じ。

ろん-ぐわい ⸢論外 ㊀議論の範圍外。㊁論ずるまでもなきこと。論ずる價値のなきこと。

ろん-けつ ⸢論決 論じて決すること。議し定むること。論定。論斷。

ろん-けつ ⸢論結 議論の結末をつくること。

ろん-こう ⸢論功 功を論じ定むること。史記酈生傳「論レ功行レ封」

ろんこう かうしやう 〔論功行賞〕 功の大小を論決して、それぞれ賞を行ふこと。

ろん-こく ⸢論告 ㊀他人の事に就き、自己の信ずる所を論じ告ぐること。㊁檢事が被告の罪を論定・求刑すること。

ろんご-よみ 論語讀 （名）論語の書物の上の意味を解することを勤むこと。諸藝太平記「學問に志す人をばねとしめそねみ、論語讀の論語よまずなどといひける」

(諺)論語讀みの論語知らず 書物上の理解のみにて、實行の伴はざるものを罵りていふ。元祿太平記「學問をばしながら惡しき振舞ひの人を見て、凡夫の口より論語よみの論語しらずと申し候へども」毛吹草「論語讀みの論語知らず」

ろん-ざい ⸢論罪 犯罪を審理して、刑の適用を定むること。宋史眞宗紀「不レ以レ聞者論罪」

ろん-さう ⸢論爭 論諍 論じ爭ふこと。いひあらそふこと。白居易詩「蒙レ以二聲聞一待、唯將二戲論一爭」

ろん-ざう ⸢論藏 （名）佛語。三藏の一。佛菩薩の法相を論議また解釋したるものを集めたるもの。

ろん-さく ⸢論策 （名）時事また時政を論ずる文章。

ろん-さん ⸢論贊 人の事業を論じほむること。又、史傳の後に、其の人の事業に關する作者の議論を附加する文章。

ろん-さん ⸢論纂 論じあひてあつむること。又、その書。論語疏序「門人相與輯而論纂、故謂二之論語一」

ろん-し ⸢論旨 （名）議論の趣旨。論意。陶弘景文與武帝啓「論旨所謂殆同二璿璣神寶一、曠世以來、莫レ繼二斯理一」

ろん-しや ⸢論者 （名）議論する人。議論を好む人。

ろん-しやう ⸢論匠 （名）佛語。正月十四日の御齋會の内論義に奉仕する講師・問者等の稱。江次第三、御齋會「僧綱以下論匠交名付二藏人一令レ奏レ之」永治二年眞言院御修法記「第二間立二論匠几子一中略法印覺鑁番二論匠一」

ろん-じゆつ ⸢論述 論じのぶること。蘇轍文上二韓丞相一書「其所レ論述、亦已略備矣」

ろん-しよ ⸢論所 （名）境界を爭ひて、其の所屬の確定せざる土地。太平記卅五、北野通夜物語「兩方談合して、或は和談し、或は論所の方は私に負けて、論所を去り渡しける」京都御役所向大概覺書四「論所大檢使被レ遣候節」

ろんしよ けんち ⸢論所檢地 論所にのみ行ふ檢地。德川禁令考後聚九、論所取扱規則「論所檢地と申すは稀成る事に而、大體之一件は地押に而相濟み候處」

ろん-しよう ⸢論證 事理を分かちて證明すること。確實なる原理に基きて斷案を下すこと。

ろんしよう-くわがく ⸢論證科學 （英 Demonstrative science）（名）【哲】必然的原理よりして演繹的に開展せられたる智識のみを以て成り立てる科學。卽ち、數學の如きもの。

ろん-ず 論 （他動サ）㊀事理を說明す。のぶ。あげつらふ。㊁いひ爭ふ。論じあふ。字鏡「諍議、阿比論須」枕十「更に數さすまじとろんずれど」

(諺)論ずる物は中から取る 爭ふ物は中から取るに同じ。あらそふ(爭)の條を見よ。

ろん-せつ ⸢論說 事理を論じ又說明すること。意見を述ぶること。又、その文。王褒文選四子講德論「千載一會、論說無レ疑」

ろんせつ-ぶん ⸢論說文 （名）論說の文體。

ろん-せん ⸢論戰 互ひに議論をたたかはすること。

ろん-そう ⸢論奏 ㊀事の是非につき、意見を述べて奏聞すること。唐書劉仁軌傳「任二職上疏、有レ所二論奏一」㊁大寶の制、大事に關し太政官より上る奏狀の稱。公式令論奏式「右大祭祀、支二度國用一中略及律令外議應レ奏者、並爲二論奏一、畫聞訖、留爲レ案、御畫後注二奏官位姓一」禁祕抄「太政官修二論奏一、公卿連署、大臣加二名字一、上卿就二御所一奏レ之、主上書二給可字一、其樣同二詔書覆奏一」

ろん-だい ⸢論題 （名）㊀議論の題目。論ずべき問題。㊁論文の題。

ろん-だん 〜論壇 （名） ㊀議論をたたかはす壇場。議論する場所。㊁言論界。

ろん-だん 〜論談 事の理非を論じのぶること。談論。太平記（廿四、依山門嗷訴公卿僉議事）「八宗論談之梵席永絶、替ニ鬼神暢一舌之聲ニ」

ろん-だん 〜論斷 議論して斷案を下すこと。論結すること。

ろん-ぢやう 〜論場 （名） 佛語。論議ニの場處。太平記（二、三人僧徒關東下向事）「不レ知、公請論場の聖譽を捨てて、高祖大師の舊規に嚮らんには」

ろん-ちよ 〜論著 論じて著すこと。論じて著述すること。史記（叔孫通傳）「及ニ稍定ニ漢諸儀法、皆叔孫生爲ニ太常ニ所ニ論著ニ也」

ろん-てい 〜論定 論じ定むること。論決。禮記（王制）「論定然後官レ之」

ろん-てき 〜論敵 （名） 議論のよき相手。

ろんてにす （名） てにす・に同じ。

ろん-てん 〜論點 （名） 議論の要點。

ろん-なん 〜論難 互ひに論じ詰ること。互ひに非難し合ふこと。辯難。漢書（公孫弘卜式兒寬傳賛）「桓寬推ニ衍鹽鐵之議、增ニ廣條目、極ニ其論難、著ニ數萬言ニ」 後漢書（桓榮傳）「車駕幸ニ大學、會ニ諸博士論ニ難於前ニ」

ろん-にん 〜論人 （名） 鎌倉・室町時代、訴訟の被告人の稱。建武以來追加「召ニ上論人、可レ有ニ其沙汰ニ」 太平記（十二、公家一統政道）「決斷所にて論人に理を付けもれ」

ろん-ぱ 〜論破 論じて言ひやぶること。說きやぶること。說破。

ろん-ぱく 〜論駁 論じて、他人の說を駁擊すること。他人の非を論難すること。顏師古文（明堂議）「衆說論駁、互執ニ所見ニ」

ろん-ぱふ 〜論法 （名） 論じかた。議論の方法。又、論理の法則。

ろん-ぱん 〜論判 ㊀論じて理非を判別すること。㊁いひあらそひ。論爭。

ろん-ぶん 〜論文 （名） 議論の文章。事理を辨明する文章。議論文。

ろん-ぶん-しけん 〜論文試驗 （名） 論題を揭げて論文を作せしめ、之によりて及落を定むる試驗。

ろん-ぶん-たい 〜論文體 （名） 論文の文體。（記事體の對）

ろん-べん 〜論辨 論じて理非を辨明すること。辨論。禮記（王制）「凡官ニ民材ニ必先論レ之、論辨然後使レ之」

ろん-ぼう 〜論鋒 （名） 議論のほこさき。議論の勢ひ。

ろん-り 〜論理 （名） ㊀議論のすぢみち。㊁ろんりがく（論理學）の略。

ろんり-かいしやく 〜論理解釋 （名） 【法】法令解釋の方法の一。法令制定の理由・沿革及び法學上の原則又は他の法文との關係等により、論理學の法則に從ひて法令を解釋するもの。（文理解釋の對）

ろんり-がく 〜論理學 （英 Logic） （名） 【論】狹義には形式論理學に同じ。廣義には哲學の一科にして、學の原理を論究する學。